

東日本リアリズム演劇会議機関誌

東リ演

東リ演第4回総会に際して 黒沢 参吉

劇団はぐるま総会報告
各劇団の報告

劇団群馬中芸
土の会
むぎの会
南部青年劇場活動
劇団労働芸術劇場
仙台小劇場
劇団静芸
舞芸小劇場
京浜協同劇団
でくのぼうの会
名古屋演劇集団

東 西 南 北

関東ブロックの現状と問題点 よしだはじめ
機関紙を武器にしよう 栗木英章
戯曲 真土村一撥 読後雜記 栗木英章
真土村一撥を見て 劇団つくしの会
ひとりっ子を見て 柚植洋

東リ演1966年活動方針(案)

4

1966年8月

東リ演第四回総会に際して

議長 黒沢参吉

東リ演の思想は新しい演劇運動の軸になつてゐる

第四回総会をむかえる東日本リアリズム演劇会議は、この一年間に弘前演劇研究会と名古屋でくのぼうの会を加えて十五集団になり、今秋には山形、甲府をはじめいくつかの劇団が加盟をプログラムにくなつてゐる。とくに比較的順調な組織の伸長をとげています。十五劇団のこの一ヶ月の活動が、大づかみには東リ演の基本方針にのつとつてすすめられ、その実践が個々の劇団の体質と相互の連帯をつよめてゐることは、事実にそくして証明できます。

劇団はぐるまは、へ郡上一揆の画期的な成功を、へ書けない黒板の創作上演と巡演、へひとり子再演の活動によつて、岐阜を中心とした地域に一まわり大きく定着させ、同時にこばやし・ひろし氏をかなめに創作活動を発展させる体制をつくりあげました。名古屋演劇集団もまた、活発な独自行動と並行して劇団協議会の中核として、へ五十年目の太陽による名古屋労演とのタイアップをはじめ、名古屋演劇の全体的な前進に大きい力量を發揮しています。劇団静芸も東海地方の中心劇団として、へひとり子へカンカラ広場に集まれる等の公演で観客の要求を結集しつつ、年来の宿題であるへつぶてとかがり火を今秋完成すべく全力を傾けており、京浜協同劇団も昨秋のへ傷だらけの天使に続いて、つくしの会、芳芸、土の会、旧妻の会また地元とはま青年座、横浜造船はぐるま、すすめる会等の直接的な援助によってへ真生村一揆へ四都市十ーステージ（観客六千余）の公演を精力的にすすめました。

五十人の働き手の育成による拠点劇団の体質強化をめざし、へ陸橋にとりくむ仙台小劇場、困難な条件に屈せず地域専門集団としての確立を青少年観客の中にすえつた群馬中芸、拡散した東京を働く観客との結合で地域ととらえなおす土の会（へ椅子物語へはやて物語へ金魚と人間へ）、舞芸小劇場（地域小公演活動）、劇団労芸（へ朴達の裁判へ東京争議団物語）の特徴ある活動、中でも名古屋南部に根をひろげて若々しいエネルギーを噴出しながら、きわめて原則的な活動をつみあげてゐるでくのぼうの会のうどきは注目に値します。

私たちも、総会を機に、この他加盟全集団の獲得した大小すべての成果をめんみつに報告してもらひ、共有の財産をゆたかにしていくたいとおもいます。

地域に根ざして働く観客に依拠し、舞台創造と普及の任務を果たしていく東リ演の運動の思想は、会議の組織的な粹をこえて、働く演劇集団とそこに属する仲間の中に定着しつつあるといえます。この具体例は、今総会にだされるプロシクこと、劇団ごとの報告にも、総会に先立っておこなわれる第六回合同演劇セミナーにも、はつきり示されるにちがいありません。

もちろん、北海道演劇集団（組織三十中十一集団出演）の室蘭における第二回演劇祭の実施、青森、八戸、仙台、山形におけるサークル協議会の日常活動と演劇祭、劇団山形と信濃小劇場（松本）の誕生、昨年の八戸上の立百姓▽に統べてへ五十年目の太陽▽を自主企画した名浪と名劇協の結節、東京労演との結合で年間数回の演劇行動を定期化しつつある、東京働くものの演劇祭実行委の活動、埼玉県南の劇団くろがねや川口市民劇場等が集結しての八石もまた叫ぶ一小繫事件▽の上演と労演づくりのしどと、横浜におけるアマチニア演劇協議会の協同行動などが、直接東リ演とかかわっておこなわれている訳ではありませんが、それでも拘らず、実践行動の中で東リ演運動の思想を軸にすえておこなう事実を、私たちは鮮明にみるとできます。

信濃小劇場はその創立挨拶状の中に、「働く多くの仲間と共に喜びあえる演劇の創造を目的と」すると書いています。甲府の劇団やまなみもパンフレットで、「中央劇界が一般大衆の生活感覚から離脱していく傾向の中で、私たちが甲府で上演し甲府の皆様に

素直に喜んでいただけの作品」を創作にもとめ「日本中が文化的にも経済的にも小東京化していく」状況に抗して「甲府に根をおろし発展していきたい」とのべ、山形労働者演劇祭のパンフレットも「自分たちの生活を包んでいる歴史と風土の中からわれわれの演劇をつくりださなければならない」という村川幸次郎氏の言葉をのせていました。これは、演劇にいきいきした生命を与える道が、地域の働く観客の要求にしつかり結びつくところに求められていることを物語っています。

私たちは、こうした仲間の実践をつらぬいているものが、観客を直接の仲だらとする広汎な働く人達の民主的な民族的な要求への適応であること、そこから芸術の思想としての演劇リアリズムの探求がはじまっていること、それが困難や混乱を経過しながらも発展の方向を辿りかならず日本演劇の可能性をひろげていくこと、云いかえれば、東リ演の基本をなす思想がもはや私たち十五集団だけのもではない、今日の地域拠点の働くものの演劇の運動論を根っ子でささえておることを知らされるのです。

そこで、第四回全国労演の記念講演に講師としてこばやし氏が、東労演シンボジウムの問題提起者として黒沢がえらばれたことも、右のような潮流とのかかわりで評価される必要があるでしょう。

今総会が、まず以上のようない実情にてらして一年の総括をおこなうなら、単に私たちの確信をふかめ得るだけでなく、運動を大きく速やかに前進させる鍵を手にしうるにちがいありません。

東リ演の運動の本質をはつきり把握しよう

今年一月静岡でひらかれた東リ演担当者会議の席上、私たちのもの唯一の専門劇団群馬中芸の性格と関連して、東リ演が専門の劇団の協同体なのか、又専門劇団に対してもどういう態度をとつて行くのか、という疑義がました。

機関誌「東リ演」三号で、岩田西リ演議長が、こばやし氏の一号の論文に触れて、一東リ演を専門劇団の組織ではない、地方劇団の組織だとしていることは、地方文化の持つ重要性と地方劇団の現在果している役割の大きさを指摘している点ではうなづけますが、規定としては正確でないとのべています。

又昨年十一月号の「文化評論」で加藤圭一郎氏は「日本演劇の現状と演劇運動の課題」の中で、東・西リ演を結成したのが地方劇団であると書いています。（「日本共産党の演劇政策の確立のため」）という副題をもつ同論文が、東・西リ演の運動、地方地域のまた働くものの演劇に関して言及している部分については、今総会の中で一定の討論が必要とおもいます。）

更に「東リ演」三号の「創造を軸にした連帯をめぐって」で山村金平氏は、一実質的には地方の自立劇団の結集体でありながら、理念としては、東京の専門劇団も含めて考えなければならなかつた発足時のイメージが今までのコースの中で一地方劇団の連合体として、しかも働くもののための演劇であると云うことを力点においてくる劇団が、創造や運動のすすめ方を媒体としてつながつてゆく

方向に進んだと、おさえています。

私たちが創立総会で採択した「結成のことば」「基本方針」は、観客を媒体に広汎な勤労人民の要求にこたえ、現在点を拠点とする演劇労働の結集を、團結、運動理念の統一、創造方法、普及の論理、組織目標の互点で要約して、この共同体の原則を明瞭にしめしますし、岩田直二氏が「東リ演の仲間へ」の文中で、一中央に対する地方という意味での地方演劇団体の組織などをとは考えていました。専門劇団に対する業余劇団の結集体をぞもありません。専門非専門を問わず演劇創造にはつきり責任をもてるものの集まりです。一とのべられる内容とも何ら矛盾しない訳です。

しかし、この三年間の活動の中で東リ演の組織的な性格が、地方一地域の働くものの劇団（例外のようにみえる群馬中芸さえふくめ）の結集体に、実質的にはなつてゐるのを認めなければなりません。現在の十五劇団ことどくが地方一地域の働くものの劇団であり、そこを挺子に運動と組織を拡張していく主要な対象が、当面同様の劇団である以上、理念として東京の専門劇団を含めて考へるか否か（理念としては、そこからこそ東リ演の運動はおこされて然るべきだった）というよなことより、リアルにまた積極的に私たちの組織の性格を見ることが重要だし、更にいえば東リ演の運動の本質を、ここに立脚して把握する必要がさしつけてあるとおもうのです。

東リ演加盟の地方一地域の劇団は、今日の文化状況の中で、どういう位置と役割をもつてゐるでしょうか。

この場合、劇団の拠つたつ地方一地域というのは、東京をいわゆる中央とみてて、それに対置させた地方などというところではな

く、日本全体を俯瞰的に構造的にとらえた上で地理上、歴史上、社会上の正当な位置をもつ地方としての弘前であり、岐阜であり、また東京であります。従って、弘前の働く市民は日本の働く人民の一部ではあっても、東京一中央を裏がえした意味での地方人などでは本来ないし、その弘前市民に正対するかぎり弘前演劇研究会は、そのまま弘前を拠点とする日本の一劇団である訳です。

△郡上の立百姓△が、訪中新劇団や劇団民芸の演目になつて、日本と中国の広汎な人々の支持をかちえるにいたつたのも、作者と劇団はぐるまが岐阜の勤労市民を振りどころにし、そこへの奉仕を徹底してつらぬいた一現在もつらぬきつつあるという一点にその要因があります。

そして△郡上の立百姓△△書けない黒板△△人が斗うとき△△仲間の歌△△カンカラ広場に集まれ△△陸橋△△北方の記録△△真土村一揆△△黙秘△△われらの街はささやきにみち△△芽ぶき△△などの創作劇は、自分の地域を観客との連帯によって拠点に変えていく思想の実践として生まれ、甲府やまなみの△△黒土△△横浜麦の会の△△青年△△劇団山形の△△北方の教育△△等も、支配階級の画一的な思想文化の攻撃を、地方地域のまさに「表情をもつ観客」との結合によつて△△とめ、逆流させる運動ととらえられるし、このことは東京の中でも労働者の斗争とかたく結びつくことによって拠点を築く努力が、劇団労芸の△△東京争議団物語△△舞芸小劇場の△△火だね△△土の△△会の△△金魚と人間△△などの新作となつて表出されようとしています。このことは、「地方文化こそそれからの文化」でこばやし氏が指摘するどおり、労働者を中心とした大衆に結合して存在一するわれわれが既製脚本に依存するのみでは一われわれを守ってくれる地

域の大衆の要求に応え一得ないところから、創作劇を生みだす必要を感じ始めて来たことのあらわれに他ならないし、従って地域にふかくわけ入つて働く人々の民族的な民主的な要求と結節しようとするかぎり、私たちの演劇創造は同時に創作劇にウエイトをかけることになるでしょう。最近、ある専門家が、△東リ演で注目に価いするのは創作戯曲だけだ、と云われたとかききましたが、その人が△不を見て森を見ないものではなく、私達の創作が地域の観客を接点に、勤労人民といふ森のがわに正対しているのを知つてほしいともいいます。

東西日本に分布する私たちの創造と組織を、それぞれの拠点の動く人々との合作によって強め、増やしていくことの意味をこばやし論文は、△こうした地方劇団の創造を、労演が守り育てようとしている。地方劇団の創造が一定の力をもてば中央劇団にはねかえり、その地方文化の厚味の上に立つて、より質の高い文化を生みだし、われわれに影響を与えてくれるに違ひない、と強調しています。

△△地方一地域の劇団△△ことと並んで、私たちの殆どがいわゆる業余（この名称は正しくないと考えるが）の劇団だという事実は、運動の本質とどう関わつてくるでしょうか。

私たちには、専門か業余かの区別はあまり重要なことを考えてきませんでした。それは、観客にとって重要な意味をもつのがつくりだす舞台であり、働きながらの芝居だから低い質のものも許されるという甘え方は、私たちが攘滅すべきアマチニアリズムの最たるものであり、働きながらやつては…といった前書きを、假りにも質讀とはうげとれなかつたからです。

事実、観客の私たちへの要求はきわめて高いものです。創造の全

分野にわたって、一つの到達点に安住することを許さず、すぐ次の到達点をもとめます。たとえば大道具のしごとにたゞさわる私自身三分も五分もかかって舞台転換をして、た三年前、二十秒三十秒でそれができるなどと考えたこともなかつたのですが、観客にその要求があり、専門劇団ではそれに応えてくる以上、演出者の目標はきびしくとも達成されなければなりませんでした。これは劇作にも演技にも経営のしごともあてはまります。しかも大道具の転換ほど単純ではないこととして、劇団が業余であろうと、しごとの中味は専門者であることを求める観客によつて、業余の専門者という認識が共通して私たちのものになりつつあります。

そして、大なり小なり業余と専門の矛盾をはらんだ私たちは、劇団ごとにさまざまな形でその統一をはかっています。書記局体制の確立、專從常任の設置、期生教育制度、班別活動体制などとあわせて、二重責任制、集団指導制、カマラードシステム、稽古後深夜の会議といつたやり方で、一週間を八日にも十日にも充実させる工夫も生まれました。

この中で私たちは否応なく業余一働きながら演劇をやる、その内容について改めて考えを深めることになります。創造において専門者をめざす私たちが、業余劇団であるとすること、そこに積極的な意味はあるのか。又は専門化への過渡段階一当面、専門では食えないメシを別の労働で食つているとことなのか。だとすれば、労働と演劇の関係は相阻むものでしかなく、積極的な意味をもちえないのではないか。働くものの演劇が、日本の演劇の一主流になるということは、右の矛盾を消極的な形でとじていくことで果たせるのか。

今日、勤労人民と米日反動の苛烈な矛盾は、集中して職場にあらわれています。私たち労働者階級は、きびしい反動と戦争の政策を職場で日ごとの圧迫として、仲間と共に精神的にも肉体的にもうけて、これとたたかっています。私たちは、そのたたかいを見聞するのではなく、同じ戦列ですすめているのです。もし、私たちが真に意識的であるなら、労働と演劇の矛盾を自身によって統一していくことが可能です。これは、専門の役者より本職の炉前工の方が、炭の演技をやらせたらうまいなどという卑近なことではなく、労働者としての階級的な要求をその基礎にもつてしているということです。

私たちの仲間の一人は、芝居をやっていて何が一番嬉しいか、という質問に、職場へ帰って仲間に今度の芝居はよかつた、と云われるときだと答えていますが、職場へ帰るという無意識に出た言葉の重みを忘れることができません。

そして又、私たちが専門家ではない、自分たちと同じ労働者だということが、観客一働く人々をどんなに励まし勇気づけているかも見落せないことです。観客の要求の高さも階級的な信頼から生まれているし、それにこたえることはそのまま労働者の階級的な力量と誇りを高めることです。なぜなら、私たちの劇団を生んだのは、その人々なのですから。

右のことと関連して、専門劇団としての群馬中芸には、提起すべき問題があるでしょう。また東リ演として東京の専門劇団への積極的な接触の必要性も当然であります。さらに私たちの中でも部分的に専門化をプログラムにのせていく劇団もあります。そうしたことをおくめて、運動の本質を統一的にあきらかにしておくことが、この時期に大切だとおもいます。

個々の劇団を強化
しなければ運動は
発展しない！

今総会の乏しい時程の中で重点的に討議しなければならない問題は、個々の劇団が集団の強化についてのプログラムをどうもつてあるか、の点検だらうとおもいます。とくに、この一ヶ月の活動を通して、はたせなかつた課題がどうじうものであり、それが何故はなぜなかつたのかを極力明らかにする必要があります。遠隔のためわかりにくくともあります、この一年活動らしい活動をしていない劇団もあります。劇団員が漸減していくところもあります。集団内の不統一でくるしんでいるところもあり、指導層と団員の間に溝のできてくるところもあるでしよう。

むろん僅かの討議時間で、これらの問題に解決を与えられるとは限りませんが、最低私たちが個々にぶつかつてゐる問題が何であるかは判然させなければいけないし、それによつて私たちの活動方針を実効あるものにしていくことができます。

くりかえしますが、重要なのは各劇団が真に観客に責任をもつ創造劇団として、自己を鍛えていくプログラムをどうもつてゐるか、どうことです。個々の集団のプログラムが曖昧では、東リ演は弱い者の寄合世帯になつてしまひます。この組織を協同体と名付けた発足時の私たちの意志は、自己の集団を強くすることで運動をおこそうとしたことでした。集団を強めるとさうのは、プログラムをもつことです。観客の要求と地域の条件と主体的な力量を基礎にたてた計画を、必ず実践し、必ず点検し、さらにねりあげたプログラムに高めていく作業が、単純なようですが劇団強化の鍵です。そして劇団内部のどんな問題も観客の烈火の中をくぐることによって、究極のぞましい解決に達するといふことも、私たちの経験は教えてくれます。

プロツク活動と機
関誌（紙）活動を
重視しよう！

この三年間の活動をふりかえつてみると、私たちの連帯関係をまだ不十分だととてもかためてきたものが、一つにはプロツク単位の実践であり、一つには機関誌「東リ演」と「東リ演ニュース」の刊

行にあつた、とみることができます。

東北では、仙台小劇場が山形の演研こまくさ、劇団山形との交流にはじまって、青森、八戸の演劇協議会をふくめてつくりだした土壤に、ことしは鶴岡も加わって、力をあわせれば実質的なブロックとして大きく発展する可能性がみられます。

関東では、土の会が中心になつての東勵演が、東自協や職演懇の経験に学んで東京の働くものの演劇の結果と前進に大きい役割を果たしていますが、一方で麦の会（新潟）や群馬中芸との日常交流をどうおこすか、東京中心四劇団の創造的な連帯をどうつくるか、川口市民劇場、ころがね、よこはま青年座等の東リ演加盟をどう実現するか、ブロックとしての課題は少なくありません。

東海ブロックについては、東リ演外の劇団との提携で今年も六月一日間のゼミナールがひらかれましたが、その内容と成果については報告をうけたいとおもいます。

現在ブロック活動が長じる精力的にとりくまれているのは中部地区のようです。六月ブロック内諸劇団を結集したゼミナールに統いて、総会全国セミに向けてのはぐるま、演集、でく三劇団のゼミナールも計画され、交流の内容も創造上の学びあいを中心にして兄弟劇団としての緊密な連繋がうかがえる点で、学ぶところが大きいとおもうのです。連帯といい友好といいのは簡単ですが、相互に対手を必要としあう関係を生みだすのは、一朝一夕ではできないとしても、東リ演の背骨をつくることになるのですから。

総会を軸にして、全国合同セミ、創作部会、東リ演係会議のような全体的な結集は、日程と内容を考慮しつつ更に充実させる必要があるのですが、そのためにも今後の運動の柱を、運動方針に正しく示

されたとおりブロック会議におかねばなりません。

山形の感想でも書きましたが、地方一地域で実践活動しているサークルが、どんなに援助を必要としているかは私たちの想像以上です。協力によって、サークルをいきいきさせ、そのよろこびを周囲に波及させることは充分可能です。講習会、研究会、交歓会、リクエーション、そして既製の演劇祭典への援助とブロック中心においてほしい。又、講師や技術者の派遣をプログラムにくんでほしいと思します。又、交流内容を身のあるものにするため、相互の舞台をみあい意見をかわしあう機会をもつともつとつくつけていきたいと考えます。

東リ演の組織的拡大を数量としてあせつて実現するのは、好ましくない結果を生みもしますが、当面、一県一拠点劇団の目標はもつべきですし、現在の十五劇団がそれぞれに加盟してほしい仲間のリストをもつ必要があります。ブロックが、それとしての力量を発揮するためには、現在の数と分布のしかたでは弱すぎるといわねばなりません。加盟を要請することと、無差別に拡大するということは同じではないし、三年の間一回も加盟要請をだしていないのはやはり私たちの怠慢ではないでしょうか。

機関誌「東リ演」の刊行は、この一年の私たちの組織の大きい成果です。運動の方向をあきらかにし、仲間の経験をまなび、連帯の具体的な中味をつかむ上で、果たしていく役割の大きさは改めて強調するまであります。もし以下の諸点を改善すれば、本当に私たちの有効な武器になるでしょう。

第一の点は、「東リ演」が私たちの機関誌であるという認識が希薄であることです。これは、現在の「東リ演」の内容が全劇団の要

求にこたえられていないことや、刊行そのものが全体の要望といふより「上から」の発案ではじめられたこと等によるかもしれません。しかし、去年の総会時点から隔月で一年間出し続けてきた事実にたって、これをどう運用するかを全体で検討することが、今必要にあもえます。「東リ演ニュース」をふくめて機関誌の役割をしつかり把握しましよう。

第二の点は、次の問題と同様、第一点と深く絡んでいますが、機関誌紙の内容を真に私たちの運動に役立たせるものにするには、どういう着意がいるのかということです。この点での問題は一つには編集のやり方、すすめ方にあります。東リ演としての組織的な編集方針がなかなか立てにくい、形式的に編集委員会をつくってもうまくいかないのではないかともいいます。やはり集団の意志が反映する方法をさぐらねばなりません。二つめの問題は原稿が集まらないところにあります。この点はくどく云うでもありませんが、とにかく依頼したものが集まらない、一切をのばす、編集方針がつらぬけない、となることで刊行所はイライラさせられ疲れきつてしまふのです。

第三の点は、財政のことです。この問題は第三号でも触れましたが、時代の回収がきわめてわるいとうこと、機関誌到着の一週間後には自発的に代金を送る体制がつくれないものかどうか。東リ演内部でさえこうルーズでは、といふ不安から、外部への拡大を手控えるようになります。くりかえすようですが、これも機関誌紙を東リ演運動の弾丸にしていく私たちの思想に照明をあててみなければ解決しえないことです。

以上のような問題はありますが、機関誌を強大にしていくことが

東リ演の運動と組織にとって不可欠ですし、岩田議長からのお便りによると、西リ演総会（八月十三・十四日・松山市）を機会に「東リ演」の購読をひろげ固定化していくことであり、私としても同窓会に出席させてもらつて、その要請をおこなうつもりです。「東リ演」八百部発行七百部固定を年内に実現させること、「東リ演ニュース」毎月発行を保証すること、この二つを目標に以上の問題点の討議をふかめたいとも思います。

全集団の一歩前進 で東リ演の体質を 強くしよう！

労働者階級を先頭に日本の勤労人民の諸斗争は、アメリカのペトナム侵略に加担する戦争と反動の政策に対応して、きわめて苛烈になっています。今日、私たちの演劇は創造の上でも運動や組織の面でも、それらのたたかいと密接に結びついて飛躍的な発展をもとめられているのを自覚しなければなりません。

それぞれの集団が、この一年にあけた成果を土台に、展望をもつてたたかいをくんでいますが、今総会では特に先進部の貴重な実践に全体が学んで、拠点ごとの一步前進を確実にかちとること、それによって全体の運動の質的な底あげを獲得することに、目標をすえ必要があります。

地域を拠点に変える文化斗争の前衛部隊にふさわしい、自主的民主要劇団の体質を目的意識的につくりだそう。
演劇サークル、労演をはじめ民主的諸組織との団結をかため、拠点文化をうちたて明確なプログラムを地域ごとにかかげよう。創造の飛躍的な向上を観客大衆の烈火の中で鍛えあげるため、演劇労働者にふさわしい合法則的な計画を全集団がもとと。

地域一拠点へ深くひろく根をはることによって、日本の新しい戦斗的な演劇運動の集中点としての強大な東リ演をつくらねばよ。

劇団はぐるま総会報告

劇団総会で討議された、昨年度の総括と、今年度の活動方針について報告したいと思います。

ここに、討議資料ですら二百頁近い厖大な内容のすべてを伝えることは出来ませんので、基調となった(一般情勢、□県内情勢、さら

に創造面での文演、美術、経営各部の総括。

一九六五年度芸術委員会総括

(一)

「十周年はたんなるお祭りではなく次の十年の発展の方向を示す結節点としてとらえなければならない」というアドバイスは見事にその第一歩をみ出したといって間違いない。余劇団の例会組入れは異例のことであることこばやしの訪中、約一ヶ月のブランクは組織的にも創造的にも何の影響も劇団に与えなかつたばかりか、名演の七月例会に向ってその責任を十分自覚し、結束を固めたといえるのである。この名演の自主企画はむろん名演の組織自体にとっても画期的な運動の目標であ

組織面での各部の報告を除き、芸術委、運営委の基本的な確認の列記のみとなりましたことをまずお断りします。

また、その後附帯して討議確認されたことについては、箇条的に追記しました。

中野薰

(二)

り、名演の組織力を試す試練であった。全国労演を眺めても労演の歴史を眺めても、運動の帰結としては当然のことでありながら、業の第一歩をみ出したといって間違いない。余劇団の例会組入れは異例のことであることを考えれば、名演の取組みの真剣さと大胆な決断力には敬服しなければならない。

ところが運動の正しさは見事に結実した。

この名演での成功は、劇団十年のたん念な舞台創造の積上げと観客創造の努力が実を結んだのであるが、一つは地方演劇のあり方をわれわれにも示したわけである。一つは政治的、社会的条件を無視して突走ることもなくつねに法則的に科学的に対応し、しかもアクチュアルに劇団の方向を堅持して来たからに他ならない。また、「金を取る以上、専門劇団」という創造的厳しさを実に細い点にまで要求してきた成果である。俗にマン・シー、マンシステムといわれる創造上の集団指導は、一般には俳優に混乱を与えるにもかかわらず芸術委員会を中心とした指導は、よく組織さ

にもはねかえって来た。若尾綜合舞台、演集の創造力にもはねかえった。こうして、初日にはいつも見受けられる不安定さも吹きとばし、初日より客席に感動をもたらしたのである。これは名演の一九六五年中の例会において、一位にランクされたことによつて示されている。

この「郡上一揆」の成功は、たんに劇団のみでなく、名演の組織全体にさらに東リ演、地方の演劇運動全体に大きな自信を与えた。同時に、劇団の東海地方で果さなければならぬ役割が倍加したといつていい。われわれは今後においてその責任を十二分に自覚しなければならない。

れ何ら舞台に混乱を与えたかったのである。

二

これはまさに劇団独特のアンサンブルであり創造システムといつていよいし、逆に芸術委員会の多様性がプラスになっている事は大きな強みである。今のところ芸術委員会の指導性が極めて強いが、さらに多くのベテラン俳優がこれを守る体勢をつくることが大切であるとくに藤沢、外山、島、武藤、中村、菅原、汲田、浅野等の俳優陣は今後創造上の発言力を高めなければならない。

秋の「書けない黒板」は予定より完稿が一ヶ月おくれたため練習期間が大巾にけずられた。これは一つには名演の例会でこばやしの取組みがおくれたことにもよるが、今後新しい作家の場合も含めて、劇団として考えなければならぬことがある。

「おー君」「一揆」は地方劇団でしか生まれないしれないユニークな作品の創造の大切さと強さを示した。これから続いて「書けない黒板」が企画されるのであるが、これは東リ演の創造にも大きな影響を与えたといつていひ。一つの作品に取組む場合、すでに出来上がった既製脚本に迷うのではなく、それ以前の企画の段階から劇団に定着し始め、作者と共に作品が含まれ舞台に向うアンサンブルと創造の強味は、既製脚本の比ではない。これは専門作家と専門劇団との関係でも未だまづい。

この作品は、岐阜県政の恥部ともいべき教育正常化をがっかり受けとめたところで上演したという企画のよさもあり（同時に進学教育による人間商品化の苦悩が深刻化していく時期でもあった。）「郡上一揆」に劣らぬ関心を集めめた。但し、「郡上一揆」のステージ数に比して動員が少なかつたということは経営製作上の問題点として検討してみなければならぬ。（動員三、八〇〇人）

作品の評価の面では「郡上一揆」以上とか

て」と。これによつて「郡上一揆」なら「郡上一揆」「書けない黒板」書けない黒板一色に劇団はぬりつくされ、総力を結集するのに実に大きな役割を果してゐる。ここから劇団のより一層の発展のためにも第一、第三の作家群を生み出す必要が通感される。但し、こばやしの作品もそれは二の次であつてこうした作家と劇団との定着のためには、長い目で見るだけでなく与える劇団の力が必要であ

おどるとかまちまちであるが、今まで教育問題と真正面にぶつかって成功した作品がないだけに「書けない黒板」の果した役割は極めて大きい。とくに六百人に近い合評会が公演後組織され、真剣に教育問題が論じられたことは舞台も成功したことを見ている。とくにこの公演で舞台美術部若尾綜合舞台に依存せず自己の創造成果を示したことは、効果とともに、今後の劇団の創造に大きな自信となつた。但し、相变らず初日の舞台の不安

(三)

定さは十二分に反省されなければならない。
舞台稽古が十分でできないこともあるが、これは会場借用の条件からいって今後はさらに厳しさを増すと考えればその対策は急を要する問題である。会場を全く一日借用しての舞台稽古であったが、それでも十分でなかつたのは一つには舞台美術の計算の不足と、芸術委員会の舞台美術に対する知識と対策のなさに他ならない。云うなれば泥縄式になるのである。もう一つには通し稽古が総合的に十分積上げられていないところからくる。少くとも通し稽古は十回は厳密に行わなければならぬ。通し稽古は公演と同様に時間に集まり、効果、舞台の転換、照明の変化も計算に入れる。公演前一週間には仮初日として、仕上がるようにな演出部でプランをねらなければならぬ。仮初日は客を入れていいまでになつていなければならぬ。これはいかに演出部がプランを厳密につくつても、劇団員の自覚が高まらないかつたらどうにもならない。

かえりであり、個人の生活について、劇団としても対策をもたなければならぬことを示すと共に、労働者の権利の拡大と生活権の確保なくして劇団の存在があれまいことを示した。公演回数の増大と共に今後、ますますこの矛盾は増大するものと考えなければならない。

公演は初演キャストのほとんどをはずし新人を中心とした弱さはかくしようもなかつたが、アンサンブルによつて十分補われたといつていい。とくに七ステージという公演は、俳優を含め、貴重な創造上の体験と、観客との共同作業の積み上げといふ効果をもたらしたこととは特筆すべきことである。反面七ステージと共に安定度が違うといふことは、「郡上一揆」リハーサルによって十分な効果をもたらしたことは高く評価していいと思う。但し、それとは別筆すべきことである。観客にとって一回が勝負であり、二回見てもらえないことを忘れてはならない。ある。それ同時に、各分野相互間の協力を強めなければ「これは俺の仕事、それはおれの仕事」とセクションの妙な分離が生れる危険がある。今年、舞台美術部がプロ化するにあつたことは、個々の俳優の姿勢にも問題があるといわねばならない。例えば、「郡上一揆」について民芸の鈴木、福田氏が外山、中屋の経験をぜひ聞かして欲しいといわれたことと考へ合せるところはない。とある。と同時に自己の俳優体験の記録といふことも極めて大切なことである。初演の舞台より感動が薄いといわれたこと、また、「郡上一揆」「書けない黒板」より感

動が弱いといわれたことについては、新人俳優の創造の問題にあるより、芸術委員会で本の段階で十分その克服について討議されなかったこと、さらにテレビ、ドラマの舞台化による弱点を克服しきなかつたことにあることを反省したい。

(五)

「郡上一揆」「書けない黒板」「ひとり子」と、公演毎に劇団組織の充実が進み、各専門分野に於いて創造の主体性を持ち始めたことは高く評価していいと思う。但し、それが各分野でのなれ合いになり、創造のマンネリ化をもたらしたとしたら大へんことである。今の所、その兆候は生れていないが、専門分野に於いて創造の主体性を持ち始めたことは高く評価していいと思う。但し、それが各分野でのなれ合いになり、創造のマンネリ化をもたらしたとしたら大へんことである。観客にとって一回が勝負であり、二回見てもらえないことを忘れてはならない。ある。それ同時に、各分野相互間の協力を強めなければ「これは俺の仕事、それはおれの仕事」とセクションの妙な分離が生れる危険がある。今年、舞台美術部がプロ化するにあつたことは、個々の俳優の姿勢にも問題があるといわねばならない。例えば、「郡上一揆」について民芸の鈴木、福田氏が外山、中屋の経験をぜひ聞かして欲しいといわれたことと考へ合せるところはない。と同時に自己の俳優体験の記録といふことも極めて大切なことである。初演の舞台より感動が薄いといわれたこと、また、「郡上一揆」「書けない黒板」より感

なく、飛びこんで自己の能力を試す必要がある。それで一年やってみて、不適当であると判断したら、別の分野で定着を試みる、そうした態度がなければ、俳優として役に当らなければ、劇団に魅力がなくなるという全く初步的段階に留ってしまう。劇団はもはや、そういう劇団ではなくなつていることを知らなければならない。パートの定着していない劇団員は、自己の力で自己のパートを発見すべきである。一人たりとも「自分の仕事のない」俳優の創造に関しては前に俳優の創造白書の記録の必要性を述べたが、何より、自己の表現力の弱点を知ることである。自分の力で俳優相互間で、また演出部との個々の話合いによって摑む必要がある。「よく教えてくれない」とか「演出が何も云つてくれない」とか云われるが、個々の自發的な努力によってまだ劇団としても、そうした場を持たなければならぬ。創造的な勘のにぶい俳優がいるが、表現の多様性について、十分研究することなしに演出依存する体勢は克服しなければならない。これから、文化センターで上演するという機会が多くなるが、それにそなえて俳優の肉体的な基礎訓練はより要求されるようになる。劇団はそれを助ける体勢を早急につくらねばならないことはむろんであるが、個々の日常生活での訓練以外にない。俳優の倫理の確立はまだどうしても確立されえない。職業、生活条件によつて制約され

うるが、未だ電話連絡が行れない者が一部あることはもっての他である。せっかく出て来たのに一人の俳優の倫理性の欠陥によつて、練習に支障を来たすことが、相変らず克服されないのは「何とかなる」という安易性が日常化したことにもよる。ここに十分な通し稽古が出来ない原因がある。今年より、少なくとも一週間前の仮初日を絶対実行しなければならない。とくに合理化攻勢、労働強化、職場及び家庭での責任の増大に伴いより一層の倫理性を堅持し、監修との連絡の緊密化を計らねばならない。

以上が芸術委員会の総括の大略である。この総括の上に、今年度の方針案は具体的に提出してゆきたい。

今 年 度 の 方 針 案

(一) 総合舞台はぐるまの発足

ながい間の懸案であり、くり返えし討議を重ねてきた照明を中心とした舞台美術部を独立採算制により専門化することである。この体制は、創造上の強い要求であると同時に、来春完成の文化センターを中心に、地域の各種の団体の強い要請もある。若尾綜合に派遣してきた、金森、楠目、宮本を、核にして、今年はこの体制への具体的な準備に入りたいと思う。

(二) 新人作家の養成は劇団にとって緊急事である。

国内での及田、鹿島、篠田、大谷、飯尾、服部は勿論、劇団外の県内の人々にも呼びかけ定期的な研究会を重ねる体勢をつくりたいと思う。劇団に所属しないで、もしくは出来ないで、創作の勉強をつづけている人は多い。その人達と集団をつくるのだ。創作を発表する誌をつくることはもとより、劇団は執ようさらに五年、十年の長期の積み上げが、からず新しい作家を生み出してゆくことと確信している。

劇団での期生教育は、これまで殆んど成功していたとは云えない。これでは、劇団の層をさらに厚くすることは出来ないし、新しいエネルギーの注入なくしては停滯が生れるやもしれない。

尚、この発足にあたっては、これまで指導を受けてきた若尾綜合の援助をさらにあおがねばならないことはもとより、劇団全体の取り組みもまた運動としてより強固なものにしてゆかねばならない。

(二) 作家集団の結成

いろいろな困難が予想されるが、劇団は全力をあげて研究所との一体化をはかり成功させたいと思う。

いろいろな困難が予想されるが、劇団は全力をあげて研究所との一体化をはかり成功させたいと思う。

はぐるま演劇研究所

設立草案案

昭和四十一年五月十三日

一、設立趣旨 岐阜の演劇文化を創造面から益々高め、発展させる。

一、名 称 はぐるま演劇研究所

一、責任者 こばやし・ひろし、外山文孝、飯尾陸郎

一、事業内容 岐阜市、岐阜市周辺の居住者を中心し研究生を募集中、演劇実習、演劇公演を目指す演劇創造に自

主的にとりくみ、研究を重ねて演劇創造の喜びを体得し、やがて劇団はぐるまの演劇創造を推進する新人を養成し、広くは岐阜の演劇運動を発展さ

せる演劇人を、確保していく。

一、募集人員 二〇名

(現在、研究生十三名)

講座

- ① 演劇概論
- ② 文学
- ③ 社会科学

劇団はぐるまについて

演技実習

(基本知識と基本訓練)

(九月 創團内における

実習公演) 田中千木夫

「おふくろ」他

(五月 卒業公演)

① 入学金 五〇〇円

(入学日)

② 授業料 三〇〇円

(毎月第一土曜日)

③ カンパ

右によって公演費を積み立てる。

六月二日

一ヶ月(六月一五月)

毎週火、木、土、

一、開校

一、修業年限

一、研究

一、顧問

一、応募資格

男女とも中卒以上

(但し高校は学生は除く)

五月二十八日午後六時三〇分

於劇団はぐるま

履歴書と作文(私についてをあわせて拡大してゆきたい)。

多幕物の、しかも全劇団員の参加なくして実現しない「書けない黒板」については、郡上一揆同様、それ以上の困難がともなうと思うが、総力を結集してこれにあたりたい。

予定される活動は、

九月 名古屋

十月 大垣

多治見

十一月 岡崎

愛知大学

以上である。

(四) ひとり子名古屋公演について

放送法の改悪はもとより、最近とみに激しさを加えるマスコミ労働者の弾圧、マスコミ

への國家権力の介入という情勢のなかで、名古屋の民放労連との斗いと結合し、ひとり

子名古屋公演を実現したいと思う。(六月二

十四日中小企業センター)と同時に、この公演は郡上一揆でつちかつた名古屋の観客の期待と要請に答えようとするものである。この

責任を果すために、芸術委は早急に岐阜公演

の欠陥を整理し、脚本のレジーに入ること。

又、スタッフ・キャストは、劇団の総力を結集するために、新人を中心とした岐阜公演のメンバーを大幅に組み替えて稽古に入ること。

以上を公演まで一ヶ月、連日のスケジュール

のなかで、完成したい。

(五) 新人作家による公演について

今秋に予定している、篠田、鹿島による新

人作家の公演は、前者に芸術委の小林、後者

に田村が協力して、第一稿、第二稿と進んで

いる。

しかし、今なお、上演に耐えうる作品にいた

つてはいない。

これによっても、劇作という仕事の困難さが理解出来ると思う。

この新しい書き手の創作への姿勢を劇団は是非でも守りとおさねばならないし、ねばり強く協力してゆかねばならないと思う。その意味で、今秋の予定を、さらに来春(五月)

に延期して研究生の卒業公演に、あわせ上演できる体制を検討したいと思う。

(七) 創作劇による来春（二月）公演について

かつてアメリカの爆撃機がスペインに水爆を落し、住民を恐怖のどん底におとしめた事件があった。

この恐怖はスペインの恐怖だけではない。人類の恐怖であり、また日本人の恐怖でもある。この事件に材をとり、喜劇として、こばやしひろしが準備に入ることになった。こばやは現在、広島に原爆を投下したアメリカの飛行士「イーザリー物語」を執筆中であるが、その脱稿をまつて、つづいてこの作品の創作に入り、劇団もまた、来春二月の文化センタの開館と同時に上演できうるよう、その創造に取組んでゆかねばならぬ。

(八) シュブレヒコール「ヴエトナムの炎は消えない」について

今年度の公演スケジュールは創造面についてだけでも昨年度に比してまさに飛躍的な強行軍である。又、研究所、綜合舞台、作家集団と確実に果されねばならないことも山積している。さらに組織面でも、東リ演、対外、事務局をはじめ、学習スケジュールはまさに連日の出席を要求している。そのなかで、県内の民主、平和、独立を守り斗いとる、あらゆる集会に劇団員が参加することは不可能に近い。

それを創造でもって参加しようとするのである。これは、劇団に対する強い要請であると

ともに、劇団の思想的な団結であり、姿勢である。

サイゴンで若くして銃殺された電気労働者

グエン・バン・チヨイとその妻ファン・ティ

・クエンの手記に材をとったこのシュブレヒコールは、上演時間三十分、照明、効果はも

とより俳優にとつても、ゆうに一幕物に相当

運営委員会報告

一 組織活動

新しい活動方針も生まれてくると思ひます。

一昨年の総会では、もつともっと組織を分

みの不安定さは、ここ一、二年の二重所属制を中心とする組織活動の、活動としての問題点を大きく露呈したものと云えます。前々日になつて「行こうか」「じや明日稽古場に来てプラカードをつくろう」という程度で、統一スロガーンも知らず、又芸術団体としてのスローガン、又劇団の当面する訴えも討議せず、無目的に行列したことに、集約的に表

されて云えます。これは、はつきりと、運営委

会の活動計画の基本線である。その他、各部門の研究体制、勉強会については、ここでは除く。

する稽古を要求する。

本来のスケジュールをくずさず、稽古時間が終つてからの稽古で、早急に仕込むこと。

昨年度は、ビニオンが中心となつた独自の点検活動、又製作部の働きによる観客創造活動、又舞台美術部の設置など、めざましい独

自活動の中で、それこそ組織的に劇団を廻すことのキザシが見えはじめ、小林さんに創作活動に専念してもらう事もある程度出来つつあります。それが前述のような弱点を表

わしてきたのは、どういうわけでしょうか。

まず第一に云えることは、請負主義に陥りその部門と部門との、横の連絡がもたれなか

つたこと。

月一回の劇団内集会が、定期化されなかつたこと。

運営委員会が、年間の行事プランをたてなかつたこと。

運営委員会が定期化されずに、ややもするところ、小林と田村、田村と松岡、松岡と小林、という風に、その時に起きた事件事件をそれこそ個人的に話すことによって、思いつき的に処理されること。ですから、訪ねたり、訪ねられたりして、冗談的な話し合いの中で計画すら進められることがあったのです。

一応は、強力を指導層への信頼の中で、問題にならずじまいで行けるようですが、本来組織というものは、下部からの問題提起を全部一つ一つ討議し、その時点に立って大局的に処理と方針を打ち出すのが、運営委の姿だと思うのですが、各部門の担当が、問題をややもすると、この三人に話することで済まされてしまうのです。

だから単に運営委員は、その時バツタリの一方的報告のみに終るキレイがあり、そこから請負主義が発生し、ひいては官僚主義のニオイさへ、このままでは出で来ます。「ああそうですか」と受取りはするが、運営委員会に、そこはかとない不信感を潜在的に抱くものもいるでしよう。

これが、このまま積み重ねられていくと、それこそ組織的に混乱し、セクトも生まれてくると思ひます。

一方、わたしたちは、「郡上一揆」名演例

会といふ、日本新劇史上画期的な公演をなしだしました。しかし装置も、照明も、観客動員も、それこそわたしたちはなにもせずに、つくられたいわば全く特異なケースとしての画期的な公演であつたのだといふ自覚を常に持たなければならぬと思います。

十三年の歩みの中で、今では数千人の観客と、次々と産み出される戯曲の中で、全国からもはつきりと注目されてきています。それと同時に日本の新劇運動は地方からしか生まれ得ないということを、私たちは知りかけています。

今国会では、建国記念日の制定、放送法の改悪、小選挙区制の実施等あらゆる反動化立

法と、来るべき安保改定へ向つて着々とレイル化への道を歩もうとしています。こうした時期になればなる程、私たちは単に個人の趣味や好みでのみの劇団ではなく、当然、社会的にも重要な仕事として、活動しなくてはならない責任がますます要求されてくるでしょう。我々の側の文化を守るためにも、私たちにはより密度の濃い巾広い活動を今後続けていかなければなりません。

しかし、私たちは「郡上一揆」の名演例会「書けない黒板」など、我が國の昨年度に上演された創作劇の中で、中央、地方を問わず既に我々の活動を除外して考えることが出来なくなってきています。

そして、このことはここまで築きあげた劇団員一人一人の苦惱に充ちた斗いの所産であることは、誰一人否定出来ないと思つてします。このように社会的にも大変な影響を与えるために、これまでの欠陥を徹底的に批判し合い、庶務、東リ演、対外、経営、改築、の活動を、より運営委員会討議の中に反映させながら、一層実り多い新年度へ進んでいきたいと思ひます。

〔各部総括（略）〕

一九六六年度運営委員会活動方針（案）

○組織面

○ 部会、劇団集会、運営委員会の定例化

云うまでもなく、総括の中で表わされていいる問題点は、すべてこの中に集約されています。集団主義的な運営体勢をより深めるために、毎月第一土曜日は部会、第三土曜日は劇団全員集会日、従って、第一土曜日の部会によって提出された問題を、必ず第一土曜から第三土曜の間に運営委員会を開き、整理して集会にのぞむことになります。これは、稽古よりも優先させて、必ず行うようにしなければなりません。この中で劇団員の集団的倫理も、より高まっていくと考えます。

○ 学習会活動を強める

A 東リ演

これは云うまでもなく、各地劇団相互の交流を通して、あらゆる問題点を吸収し、提出する中で、より我々の活動を総合的に点検し、発展させて行きたいと思ひます。

B 時事問題

演劇活動にとって、我々をとりまく政治情勢を知ることは、最も大切なことだと云えましょう。そのために随時問題点を取り上げて研究したいと思ひます。

C 観客普及勉強会

観客普及面に於て、観客が何を望んでいるかを、あらゆる経験をのべ合い、よ

東リ演加盟劇団一覧

劇団はぐるま	* 岐阜市西野町1	
名古屋演劇集団	名古屋市中区西新町2-8 大東ビル内	中部ブロック
劇団新風	名古屋市千種区自由ヶ丘2-47-16	
でくのぼうの会	名古屋市南区大曽通3-12 栗木貞章方	
劇団からつかぜ	浜松市板屋町315 伊藤アパート内	
劇団静芸	○* 静岡市昭府町239-1 静岡演劇音楽センター内	東海ブロック
劇団つくしの会	富士宮市富士見町 野沢武司方	
京浜協同劇団	川崎市上平間1275	
演劇集団土の会	* 東京都港区麻布等町38	
舞芸小劇場	東京都豊島区池袋2-1238	関東ブロック
劇団労働芸術劇場	東京都品川区南大井1-14-16	
劇団群馬中芸	前橋市相生町28	
麦の会	新潟市関屋本村町2-217-2 佐山浩方	
仙台小劇場	* 仙台市本荒町17 仙台労済内	東北ブロック
弘前演劇研究会	弘前市品川町1 ブラジル内	

*印は運営委員劇団 ○印は事務局劇団

り観客拡大のための会にしたいと思いま
す。

ノルマ制、未精算整理達成のためにも別
紙グループ別に従って、絶えず研究し合
いましょう。

以上の三つの柱にして、とりあえず七月か
ら八月までを一と区切りとして次のとおり学
習会活動に全員出席のもとに行う。
東リ演関係については、左の三行事に一人で
も多く参加することが、とりもなおさず學習
ですが、その中で、またその別では次のよう
になります。

中部ブロックセミナー（六月四・五日）

中部三劇団交流会

全国ゼミ（八月二千二日）

※地方文化について講師こばやし（八月五日）
※東リ演ゼミに対する姿勢について 東リ演係
（八月五日）

※東リ演設立から現状・これから役割
黒沢参吉（交流会）
※東リ演の特に創造の問題について こばやし
（交流会）

※中部ゼミの総括・中部ブロックの役割

若尾正也（交流会）

時事問題

※ソ連の現状と我々の生活

愛知大学 坂本先生（七月六日）

※小選挙区制について 対外部（七月八日）

※原水禁大会を控えて

岐大 千賀先生（七月十六日）

※沖縄、小笠原問題について（七月十七日）

※放送統制法について 民放労連オルグ班（七月二十三日）

小選挙区制反対行動として街頭署名に七月十
日出ること、七月十七日文団連の沖縄、小笠
原返還要求集会に参加することを確認。

普及勉強会について

※劇団倫理、普及勉強会

運営部・経営部（七月三十日）

○ 昭和四十二年度末には稽古場改築

○ 二重所属制による組織活動の充実

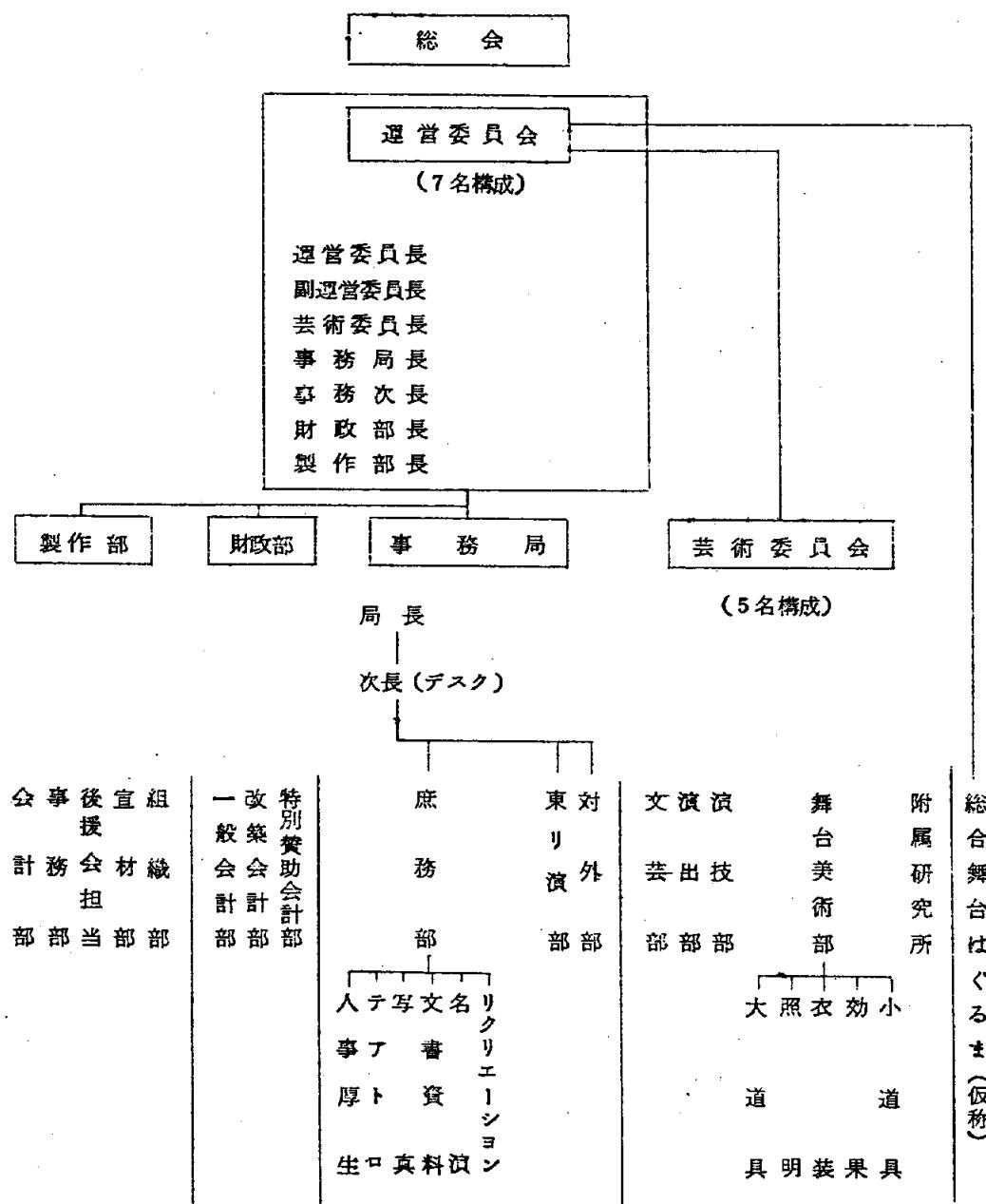
劇団員は志望する部門と同時に劇団から要
求される部門を担当する責任があり、一昨年
から、その制度を採ってきたし、本年もこの
体制ですすむ。

この問題は昨年度の方針の確定である。当
初の目的の五〇%しか、この半年で実現され
てはいないので、財政部に改築会計を置き、改
築カンパ拡大の計画を立案、全員で討議、行
動に移しかえてゆくこと。

これまで常任であった打田が普及活動に殆
んどばわれ、事務所での事務処理が遂行で
きなかった。又、本年度の事業計画の拡大に
ともない、デスク担当の常任を設置、劇団員
の菅原をこれにあてる。このことによつて、
昼間の電話、文書処理、すべてを円滑にして
ゆきたい。

○ 事務局次長（半専従）の設置

劇団はぐるま組織図



普及活動報告

私たちの劇団で普及活動と呼ぶものの中に三つの方法が今年はあった。その一つは労演運動の中に、あとの一ツは劇団員の持つ重い個人の会員と、常任の持つ団体、個人、サークル単位の会員を含んだ普及活動である。今「はぐるま」は製作部を確立した中で、劇団員、製作部員、常任の三者が一体となり、私たちをささえている中広い勤労市民と、地方の演劇運動を発展させ、着実な活動を続けている労演の仲間たちと深く結びついた時点でこの地方の普及活動を発展させてきた。

その一年間の活動報告を東リ演の製作担当者やその仲間たちにすることのできるところを大変幸いと思う。ただこの報告は私たちの経験の浅い活動の中でつかんだ貧しいものでもあり、不充分な点も多いことと思うので名劇団で討議され意見や批判がいただければ幸いと思う。

「郡上一揆」名古屋公演

全国労演ではめずらしい試みとして取り組まれた地元の業余劇団の例会「郡上一揆」はすばらしい成果をあげ労演運動の歴史に豊かな実績をきさんだし、劇団は舞台創造に対する

る自信と、常任は名古屋でのオルク活動の中でも勤労市民から普及活動に關する数多くの貴重な教訓を学んだ。

「郡上一揆」名古屋公演の準備は半年前の二月七日から始まつた。三月一日には「名演」ごとに行なわれた。又現地の南宮神社の仮舞の企画部で正式に決まり全会員に下されていつた。三月二十日には郡上八幡への「バスハイク」第一回準備会が持たれ、三月二十五日に行し、三月三十一日には例会に関する「はぐるま」の必要経費の提出を行ひ、四月六日に

は「名演」「演集」「はぐるま」の三者が打合せを岐阜で行った。四月十二日には「名演」と劇団製作部、運営委員会とで公演計画を立てた。

-19-

イク」は組織部と地域会議の活動家を中心にして三月中旬にその会が組織されバス八台、五〇〇名を五月二十二日まで達成させるためその活動が開始されていた。

「郡上バスハイク」の当日は参加者四八〇名に劇団から三十名の仲間が合流した。車中のサーカル間の交流、「はぐるま」の仲間による「郡上一揆」についての解説など、例会への理解を深めた充実した交流会が各バス台で「郡上一揆」の一場面を劇団員が演じたり、グランドで「郡上踊り」の指導、帰りの車中では作者の小林が訪中報告を兼ねて「作品」に対する説明や中国の文化についての報告をバス八台次々とのりうつり精力的にかけめぐつた。

この「バスハイク」を通じて実行委員会に参加的な勤労者には受け入れやすいが、そうでないところには不安があり、又地元劇団の例会と云ふことで会員の減少を見るかもしれない、だから目標を四、三〇〇名に置き、それ以上の拡大を達成させるために「はぐるま」の常任が週三回、五月一七月まで名古屋をオルクすること等を決め具体的な行動に入った。評で、小林ひろし氏の個人的な魅力もあつたが、彼の常任は名古屋オルクをするかたわら、「バ漫談説の会話の中でするく現代を諷刺するスハイク」実行委員会に参加した。「バスハイク」内容と、地方の文化運動の重要性などを説得

力の豊富な話し方で講演したこと、「郡上一揆」に対する会員拡大を大変有利に押し進めることができたと思う。

常任の名古屋オルグの成果としては、主として未開拓の職場、学校、労働組合、民主団体等、百数十ヶ所を、オルグする中で「名演を知らなかつた」「芝居が觀たい」という要求が隠されている事を知り、名古屋には、名演のサークルを無限に作つてゆく可能性があること、地域会議を組織することの重要性を、強く認識した。この常任オルグの中で十六サークル新入会員の拡大を得た。例会の会員数は、六月の五〇四〇から五六三五と五九五の拡大となり八月の例会へと引きつがれて行った。合評会活動も「小林ひろし氏を囲む会」より少くはあつたが八回もたれ劇団に対してはげましや批判の声を聞くことが出来た。又名演の六五年の例会アンケート集約も第二位の「夜明け前」をしのいで第一位となり「郡上一揆」の成功は、全国労演に、地方の業余劇団に多くのすばらしい教訓を残した例会であった。

この成果は二月から長期にかけての取り組みと、地元劇団の例会で会員の拡大の例をみたことのない労演活動の中で、サークル活動を活発に進めたこと、地元劇団と労演運動の同一線上での連帯が強まつたこと、又、名古屋の地元劇団には、はげましと刺激を与えたことなどが大きな成果としてあげられる。又常任は活動の中で、名演から多くを学んだ。

特にサークル活動をいきいきさせることができて、すばらしい結果が出ることを、「地区労大会」「高教組大会」にオルグに入ることで感動し、はぐるまにおいては、後援会にこれを生かして行こうと考えた。現在のマスコミから低俗な文化しか受け取つていい言えたことは、岐阜にもあてはめられるといふことを考えさせられ劇団の普及活動に、自信を持つた。

特にサークル活動をいきいきさせることができて、すばらしい結果が出ることを、「地区労大会」「高教組大会」にオルグに入ることで感動し、はぐるまにおいては、後援会にこれを生かして行こうと考えた。現在のマスコミから低俗な文化しか受け取つていい言えたことは、岐阜にもあてはめられるといふことを考えさせられ劇団の普及活動に、自信を持つた。

第二十二回「書けない黒板」普及活動

「書けない黒板」普及活動は九月一日から入り、目標を教組に置き団内で学習会に入る。

この学習会活動の中で団外からの講師、助言者、後援者などの県、市、高、教組、大学教授、大学生、高校生を含む仲間達と、ケイコ

表①でもわかる様に教組と民主団体、学生の活動家にたよつてオルグがなされていったことがわかるが、もっと後援会を積極的なサークルの単位の活動を進められる様な、そんな後援会に発展させるためには今の後援会の中から活動家を作り出していくかなくてはならないと考えた。「書けない黒板」公演の当日後援会の活動家に受付と、プロ売り等を、手伝つてもらい、この様な全くあたりまえの活動を通じ、次への飛躍を期待したのであった。

第二十三回「ひとりっ子」普及活動

「ひとりっ子」の公演について製作部で討議した結果、会場条件の悪い公演なので動員目標を下げ少ない予算で取組むことになった（徳明公民館は市公会堂より大変、舞台、客席が悪く三五〇名の座席と会場が通りより入る中で发展させ、演劇に対する理解と人間関係の深まりを、強める中で、はぐるま後援会の活動家を育てて来た。この活動方法は、名演例会で学んだことを、実践してみたのである。又私たちが今までのやりかたで三、〇〇〇人

表①

「書けない黒板」観客表 (常任関係のみ)

	持出し	入場者	入金枚数
1 教師 (教組も含む)	644	373	464
2 民主団体	905	359	349
3 大学生	355	206	188
4 高校生	168	92	88
5 後援会員	89	61	67
6 個人	158	56	67
7 労働組合	185	29	38
8 ブレイガイド	60	29	27
9 民主教守る会	120	54	25
	2624	1,259	1,313

○大学生と民主教育を守る会の方は、劇団員の方からかなりの数が入っている。
○表の後援会員は常任を通じた会員であり、自主的な強さを持っている。
○総動員数=3831名(内招待、家族、東リ演関係が135名)

表②

「ひとりっ子」観客表 (常任関係のみ)

	持出数	入場者
① 後援会員	191	150
② 後援会員個人	117	101
③ 高校生	213	96
④ 民主団体	823	33
⑤ 大学生	26	14
⑥ 労働組合	25	4
⑦ その他		85
	1,295	533
○総動員数	1,774	

れないほどの仲間が集まり、そこで話しきれなかつた問題を後日に二日に分けて話しあわせた。

四、○○○と動員して来たが、これを三万四万にしていくためにはどうしても自主的なサークル活動と云う面を強めなくては不可能ではないかと考え出したからである。そう思いながらも出来なかつたが「名演」例会で学んだことをここにいたつて実践しはじめたのである。

勿論、その活動に参加した仲間はかぎられてはいたが「ひとりっ子」のスライドを見る会「スケート大会」「卓球大会」など公演前五〇枚の動員と、又活動家たちと進めて来たハガキ申込みは、一〇一枚の成果があり、合計すると二五一枚となつた。これは総入場者五三三名(常任の受けもつた数の中での)の諸活動を活発にして行く中で、誰ともなくその準備などの点からして週二回「はぐるま」場係、受付、売店とその活動はいきいきとしていたし、公演後の合評会には会場に入りき

このような活動の中から岐阜で毎月演劇を観ようと云う仲間も拡大され、「東リ演劇」三号の「四、○○○名動員の要因と経験」の中での……後援会担当者が会の自発性をばづよい活動が一月から始まつた。全てがスムーズに行つたのではなく突然ながら進められた。その結果として、別表②のよう活動家数十八名、チケット持出数一九一枚中一五〇枚の動員と、又活動家たちと進めて来たハガキ申込みは、一〇一枚の成果があり、合計すると二五一枚となつた。これは総入場者五三三名(常任の受けもつた数の中での)の諸活動を活発にして行く中で、誰ともなくその準備などの点からして週二回「はぐるま」場係、受付、売店とその活動はいきいきとしていたし、公演後の合評会には会場に入りき

うもないことである。そのために私たちは今までにやらなくてはならないかと云うことを見つめ、手さぐりでさがし求めた。そのためには私たちのまわりの多くの勤労市民と深く結びつき、密度の濃い「人間関係」を確立し、その中で地方の文化、日本の文化を語りあうことから出発しなくてはならないと考えた。

そう云う中から、眞の民主的で民族的な文化が生れ育つものと思うし、ただスローガンだけで終るのではなく勇気を持って大衆の中に飛び込む以外に他に方法はないだろう。

このようなことは、名劇団でも行なわれていることと思うが、より早くすばらしい普及活動を確立するためにはまず製作部の確立と、普及専任の常任体制を作ることが急務であろう。創造の面でも「人間関係」は大切であるが、五十数名の劇団とは異なり、一、〇〇〇人一万の大衆を組織するためにはそれ以上の「人間関係」についてや人のエネルギーが必要とされるはずである。そのためにも一人や二人の普及専任の常任がいてもおかしくはないと考える。このことをおろそかにして創造を高めようなんてナンセンスに近いと思う。創造だけ高かめたらお客様が来ると思つたらとんでもないことである。

ごくあたりまえのことを書き並べたが、現代は「あたりまえ」のことが仲々できない世の中でもあり、私たちはこの「あたりまえ」のことから実行にうつしていくと考えてい

秋には後援会の活動家が中心になり、岐阜労演準備会なるものの発足がみられるとか、その発足にあたっては私たち「はぐるま」もその仲間たちに対しできるかぎりの援助と協力をそして、演劇を創る側と観る側とがいっしょになつて地方の文化を育てて行きたいと考えている。

又劇団の来年のスケジュールは、二月にこはやしひろしの新作「アトミック・ボトン」(仮題)を新しくできる文化センターで上演し七月には児童劇「森は生きている」を八、〇〇〇名の動員目標で取り組むことになっていく。秋には結成される「岐阜労演」の方から、「はぐるま」の例会を取り上げたいとか、山積にされているこれから普及活動の仕事を、今年から始められたグループ別の普及勉強会を中心に行き劇団財政の確立と創造に突き上げる普及活動を今年も、発展的にとらえ押し進めて行きたいと考えている。

製作部常任
打 田 茂

☆ 西リ演 第五回総会

八月十三日・十四日・四国松山で

西日本リアリズム演劇会議の第五回総会は八月十三日、十四日の両日、愛媛県松山市で、

関西十一、中国三、四国二、九州一、計十七劇団の結集によつてひらかれる。

第四回総会で討議された、①先進的人間像をどう描いていくか、②観客の要求をどう結合していくか、③普及における演劇形式と創造方法との実践的なみちすじ、の三点を一年間の演劇行動の点検によつてあきらかにし、今年は特に、各劇団の活動報告とその問題点若干の創作作品についての討議を重点的にす

めの方針。

機関誌「東リ演」の固定化と拡大をとつかりに、同誌の合同機関誌化をめぐつて、東リ演から代表を派遣したいとして検討したが、スケジュール等のため断念せざるをえず、東リ演としてのメッセージをおくつた。

合同機関誌化の問題は充分な討議を必要とするが、実現は両組織の強化のため有効であるので、今後連絡会議をかさねていこうと考えている。

本誌次号には、西リ演総会の詳細な報告を掲載したい。

公演記録及び予定表

劇団はぐるま

回数	公演日	作 员	作 品 名	上 演 場 所	備 考
21回 名演例会	4月3, 4日	モリエール	守 銀 爪 (3幕) (プロローグと エピローグ)	商工会議所ホール 名古屋名鉄ホー ル	⑤ 65年
	7月23, 24, 25日	こばやしひろし	郡上一 捧 (3幕)	岐阜市公会堂 上	⑥ 原水禁報告会
22回	8月29日	こばやしひろし	死んだ 海	同	⑦
	11月20~23日	同	書けない黒板 (4幕)	同	⑧
23回	4月18~24日	家城、寺田原作 こばやし 脚色	ひとりっ子 (3幕)	徹 明 公民館 名古屋中小企業センター	⑨ 66年
	6月24日	同	同 上	同	⑩
24回	7月17日	こばやしひろし	ペトナムの娘が帰る	徹 明 公民館 NBNの近くの公園	沖縄、小笠原返還要求文化 のつどい NBN名古屋テレビ団結納涼大会
	7月31日	同	かけない黒板 (4幕)	名古屋名鉄ホー ル	⑪
	9月11日	こばやしひろし	"	大垣中央運動公園 岐阜文化会館	⑫
	10月	"	"	"	子供の劇場
25回	2月	"	健闘アミック・ボトム	"	⑬
	7~8月	マルシャーク	森は生きている	"	

各劇団の報告

劇團群馬中芸

六五年四月の総会で決定された、創造二ヶ年計画の一年度の活動を中心にして進め、八月は夏休みで、高校公演が無いのを利用して、基礎訓練で体得したものを盛り込み、手持ちのレバ・チエーホフ作「熊」「結婚の申し込み」(翻案)を含めた構成舞台「こうもり傘を差上げます」を小公演型式で十日間地元前橋で公演を行いました。この公演では数多くの収穫がありましたが、特に創造面で同じ舞台で十日間続けるという積み上げが充分行えたことです。観客動員は充分とはいませんが、毎日のように舞台を観て、きびしい批判を出してくれた人など、私たちの固定観客となってくれるような人達をかなりの数掘りました。こともできました。また、このような新しい演形態におおいに利用出来る確信をもちまし

た。

その後、演技基礎の訓練は公演の間をぬって、スタニスラフスキイー・システムを基礎に置き、「俳優修業」にのつとつて訓練が続けられ、週間日程を立て、肉体訓練(日舞、バレエを含む)発声・音楽・詩の朗読・エチュード・演劇學習・一般學習等を時間割りにのつとつて行いました。

七月から準備に入っていた、新しい高校用レバ「ひとりっ子」を十一月十五日に幕を開けました。私たちの公演活動の中心は高等学校ですが、以前は、一般にも高校にも通用するようなレバの創り方をしていましたが、この公演では、脚本作成の段階からはつきりと対象を高校生におき製作しました。この為に群馬高教組の先生たちと高校生と何回か話し合いを続け、脚本を完成させ、稽古場へも何回も来て頂き、意見を出してもらいました。充分とはいませんが、高教組との共創作の形態をとり、初日の試演会も高教組の協力を得て行いました。

高教組とのしつかりとした結びつき、高校

生を対象とした舞台、現場の教師、生徒との話し合い等々、今後の製作に大きな影響を与える。また、劇團の創造の方向を示すものを得ることが出来、普及の面でも高教組の全面的な協力を得て、かなり順調に現在も進行中です。

演技基礎の第一期の勉強会を一月に開きました。劇團内部には演技者個々の訓練を観客に見せるべきではないという意見が多数をしめていた関係もあって、この機会に、常に要請を受けている高校演劇部の生徒たちに観せようということになり、また、演技者にとつて観客の前で発表することにより、成果のしめくくりの段階を作ることと、体得したものに対し確信をもつ意味も含めて、高校演劇部の生徒を招待して開催しました。

結果は、演劇部の生徒たちには、たいへん喜ばれ、演技者も第二期の訓練に入る為の自分自身の力の確認ができ、大きな成果をあげることができました。

劇團創立以来の念願だった、本格的な小中学校公演用の児童劇「棉はたけの陽気なウサギくん」の幕を五月に開けました。劇團から分裂して存在している劇團群芸が教育委員会しつかりと結びついて活動している為に、私たちの児童劇公演には、最初から妨害がついてまわり、具体的にさまざまなか形で現われていますが、現場の良心的な教師との結びつきで、本当に子供達のことを考えているのはどちらの劇團かということを明確にするな

で、着々と公演を広げつつあります。

創造と普及の活動を続けながら、劇団の体制づくりを中心として進めています。65年4月に決定された2ヶ年計画が、創造中心だつた為に、種々の問題がおり、日程も遅れがでたため、66年5月の総会において総合3ヶ年計画にする改正案が出され承認されました。劇団の基礎である創造、普及の両輪が歩調をそろえないことには、どこかに無理がでてくるもので、財政の問題が活動を大きく左右する結果になります。この点を充分に加味させたものにする総合的な計画に正し、現在具体的な日程を検討中で、その中に含まれる問題として次の事柄が提出されています。

1. 創造委員会の学習計画
2. 劇団員の学習計画
3. 中小レバートリの作成
4. 第二期演技基礎週間日程
5. 各個人の専門家になる為の計画
6. 創作劇の作成
7. 地域の文化団体協議会の結成
8. 劇団後援会の結成
9. 創造器材の補充
10. 指導部の強化
11. 演劇研究所開設
12. 稽古場建設
13. 劇団員の確保
14. 創造生活の拡充

順は不同ですが、以上のような問題がとりあげられています。

一年目の活動としては、次略もあります。

劇団の財政面は以前とほとんど変らず苦しめ左の結果になります。この点を充分に加味させたものにする総合的な計画に正し、現在具体的な日程を検討中で、その中に含まれる問題として次の事柄が提出されています。

1. 創造委員会の学習計画
2. 劇団員の学習計画
3. 中小レバートリの作成
4. 第二期演技基礎週間日程
5. 各個人の専門家になる為の計画
6. 創作劇の作成
7. 地域の文化団体協議会の結成
8. 劇団後援会の結成
9. 創造器材の補充
10. 指導部の強化
11. 演劇研究所開設
12. 稽古場建設
13. 劇団員の確保
14. 創造生活の拡充

土 の 会

1. 概括

この期間に土の会の上演活動は四作品で九回(ステージ数一一)行なわれている。ここ

-25-

数年の活動を統計的にみればこの数字はほぼ平均に近い。その意味で一応の安定した上演活動を具体化できるようになつてきましたといえども、一方では内部的な弱さを露出してしまつた。しかも、運営的なことにしては、私たちは学び、大衆には、私たちの創造を返していく作業を続けています。

特に群馬民擁連に加盟し、中国天津市と群馬の友好的交流を行なう中で、65年秋の第二次訪中代表団には、劇団の風見を推せんしましたが、種々の事情ではざされる結果になりました。しかし、積極的に代表団派遣運動に参加し、訪中代表団の橋わたして、天津市話劇団と交流を開始しました。今秋には天津市か

ら歌舞團が一ヶ月群馬県へ来る予定で、これが実現すれば、劇団は舞台関係の仕事を受持つ予定です。また民擁連は県内の統一運動を進める母体となつてますが、劇団もこれに協力して多くの集会に参加しています。

以上のような多面的な活動の一年間でしたが、この成果の上に立ち、総合3ヶ年計画達成の為に本年も頑張ります。

なつてきたといふのは、活動の中心を常に創造に置くことのむずかしさと、把握していく東京の演劇状況の中で土の会の上演のイメージを独自の形態として生み出すかへのプランの貧しさが、製作活動において明確な方法論をもてないことなどと合せて、この期の土の会の活動を特徴づけている。

昨年度の総会時に、土の会が問題にしていた演劇サークルから演劇集団への実質的な移行は、この期間を通して会の全活動を結果的に支配した。会の体制と会員個々のあいまいさとそこからくる動搖が、土の会での活動と職場活動との矛盾に加わって何人かの会員の退会を余儀なくさせた。しかしそのことが劇団化のコースの過渡的な苦しみであり、その問題を生産的に克服しなかつた反省が、これから見通しを確実にしようとする動きとともに会員のものとなりつつある。

2. 活動の成果と問題点

(1) 上演活動

土の会はこの一年に次の上演を行なつた。

65年9月	大橋喜一作「神無月」墨田生
65年11月	活会館二ステージ (演劇サークル「一揆の会」 に協力上演)
65年11月	矢野喬作「椅子物語」赤坂公 会堂(第三回東労演)
65年11月	矢野喬作「椅子物語」板橋医 師会館二ステージ
65年12月	大橋喜一作「神無月」板橋陽

演九回、ステージ数一一、観客は約一四四〇名といふことになる。

問題点として考えられることは

- それぞれの上演が、新しい意味をもつて計画されたが、結果としてはその意図を充分に果すことができなかつた。それは観客数の少なさに示されており、特に自主上演に対する相対的絶対的低さが決定的だといえる。原因は日常的に観客をどのように維持し拡大するかという見地から系統的に製作活動が進められず、その遂行が部分において

光保育園

66年1月 大橋喜一作「エントツのあるオアシス」吉祥寺うたごえ

「灯」

66年3月 大橋喜一作「神無月」板橋労働金庫(東京労演北部交流会)

66年4月 矢野喬作「椅子物語」北浦和

66年5月 山村金平作「はやて物語」

66年6月 山村金平作「はやて物語」千代田公会堂

(東労演春の演劇行動)

「神無月」が三回・四ステージで観客数は五八〇名、「椅子物語」三回・四ステージ四八〇名、「エントツのあるオアシス」は一回

五〇名、「はやて物語」二回・二ステージで三三〇名の観客動員となり、トータルは上

- 土の会としては、自主上演と東労演における上演とが重なり合うために力が分散してしまう欠陥を依然として克服しないという問題をかかえている。東京における土の会の展望をきりひらくために、当面どのような上演がどこに依拠してなさるべきかを明きらかにしていかねばならない。
- 土の会の観客を定着させる基礎となる土の会友の会は昨年末ようやく正式発足となつた。現在友の会員は二〇名、ここから次の段階への出発が計られる必要がある。

て展開されることが多く、したがつて一つの上演が切りはなされてしまつたことがある。さらに観客にどうみせていくかという観点をぬきにしたところで創造活動が行なわれた傾向も残つており、全活動の基礎となる基本的な考え方をもう一度考え方直す時期に来ている。

○東労演、東京労演との連帯を強める作業も昨年度に引きついで前進したといふことができよう。今秋第四回を迎える秋の演劇祭と共に春の演劇行動も本年度からほぼ定着したと考えることができる。また東労演に対する東京労演の積極的なとりくみをかちとりつあることも大きな成果として評価することができる。この方向はさらに強めが必要があり、各地域における労演の交流会組織に対して日常的に働きかける活動とともに、東りん加盟劇団のより一層の奮起をのぞみたい。

土の会としては、自主上演と東労演における上演とが重なり合うために力が分散してしまう欠陥を依然として克服しないといふ問題をかかえている。東京における土の会の展望をきりひらくために、当面どのような上演がどこに依拠してなさるべきかを明きらかにしていかねばならない。

機関紙「土の会だより」の発行は一応確立したといえるが、その活用方法はやや形式化の傾向があり、観客カードの利用も含めて個々の観客と土の会とがどのような関係を日常的につくるか、その上に立つて観客のイメージ、上演の計画の具体化が計らねばならない。

(c) 創造活動

「椅子物語」「はやて物語」につづいて黒沢参吉氏の「金魚と人間と(仮題)」が出来あがり、「椅子」の作者矢野喬作品「女は団結することができるか(仮題)」の執筆が進められている。このことは第一に土の会の創作劇活動を保障する力をつくり出していること、第二に土の会が自分たちの作家、自分たちのドラマを発見しそこに活動の基礎をおくことを可能にしていくだらうこと、そして第三に東京という地域で活動するイメージと土の会自体とを作品を通していくことにおいて評価する。その基本的な観点を支え、さらに豊かにしていくために、土の会の活動の中で特に今年度前半期の条件的にはきびしかつた活動(四作品をつくり直しながら短期間に上演していくことは土の会の現状としてかなり重い仕事であった)を開いた力量を各人が今迄にたくわえてきていることを互いに信頼し合つてよいであろう。また演技の面だけでなく從来かけの存在としておかれることが多いスタッフの仕事を日常的に行ない、

会員の力でこなしていくことができるようになつたこともわれわれにとっては喜びたい点である。

会の創造体制として、演技の中心部を確立していくという意図も徐々に果たされているが、その中心部分の創造に対する評価をきびしくすることによつて、全体の創造に対する認識を高めることができよう。

しかし、作品のモチーフ、テーマを理解して、自分の創つている仕事が思想をになつておあり、その思想を充分肉体化するのが創造だといふ創り方は依然として弱い。これは各人の勉強不足と作品の把握を全体で統一することができないことが決定的であり、そのことはスタッフの活動、製作活動にも大きな影響を及ぼしている。今度の黒沢作品のとりくみにこの弱点を意図的に克服しようとする努力がなされているが、この当然なことを自然のように開花できるかどうかは、演出および指導部の力量が問われることにつながつていい。そのことはいかえれば、創造の道すじを明きらかにして組織できない指導部の弱さと同時に、作品と演出の問題を充分討議できない集団の弱さである。作品のテーマやモチーフを形象化できることは、各個人が創造者として系統的に何を追求していくかを自覚できることであり、ひいては全般的な活動をその場その場当たり的行動の連続をつづついる大きな弱点であり、一つ一つの

活動を体験的にしか蓄積できないことであるから。

(d) 集団運営

土の会がまだ小さな集団であるにもかかわらず、組織形態があまりにも形式化され有機的な関係がつくり出しきなかつたことが最大の問題である。このことから指導部と他の会員との相互流通を悪くし、中心部がそのため空転するという傾向を招いたことは大きな教訓をわれわれに与えた。

昨年度から問題となつた「演劇サークルから演劇集団へ」の目標が現実的にはなかなか確立しえない状況を残している。指導的な立場以外の会員がなかなか全体の課題をつかむことができず、個人の条件を結果としては立ててしまい、集団の創造的規律が弱く、指導部の責任と各個人の責任との関係が不明確になり、相互の不信がかもしだれされることもある。創造を軸とする運営活動がともすると心情的な人間関係にすりかえられていくともいえる。創造における弱点、創造集団としてのイメージを見通しえない困難が、条件的にはかなりきびしい活動を連続させていくだけに、特に女性会員の中に不安をもつくなっている。

だがそのような困難に直面していく中で集団の指導部分が次第に確立し集団指導の体制が生まれてきていること。サークルから劇団への過渡期としてとらえ、そこから現実的な運営が志向されてきていくことも

確かにである。

さらにそのような問題の中で、現在の演劇状況の傾向として政治的思潮と演劇的思潮とを個人内部でどう把握するか、その差異を集団の運営においてどのように克服するかということが、土の会においても同一の問題として提起されているのだと考えねばならない。東京の場合、芝居を単にしてみたいといふ欲求だけでもそれはそれなりにすぐ満たしうる状況があるわけで、それだけでは駄目だ、創造と運動とが一体になつた活動をといふイメージがなかなか確立しえないといふことが新しく入つてくる人たちにあいまいな集団のイメージを与えてしまつてゐるともいえよう。特に土の会が願う創造のイメージがレバートリーとしてようやく具体化してきているだけに、創造を中心とする運営がこれから土の会にとつてもつとも要求されるものであらうし、

東京という地域における社会的役割を集団の認識にする方向といえよう。

3. 当面する課題
以上の活動の問題点から、土の会の当面する課題は次の諸点にあるといえる。

- ① 東京における自立演劇集団としてのイメージを明確化すること
 - ② 会員の全生活の中で土の会の活動が位置づけられるような集団組織にすること
 - ③ 製作活動および運営活動が創造を支える
- という実践を徹底すること

そのことは土の会が果してきた活動、そして内外に存在する困難、矛盾からみて安易にはのりこえることのできない課題ではある。

七月三〇・三一日の二日間土の会は全体会議（総会）を開いて今年度前半期の活動を総括し、われわれの現実から出発した後半期から

来年度へかけての活動計画を検討した。その活動は土の会員のみでなく凸版印刷演劇部の仲間の協力を得て展開されることになるが、東京の演劇集団として働きながら演劇活動を続ける独自の意味を見出すことであり、われわれのエネルギーを社会に対して演劇を通じて奉仕していくことを日常生活の中で確立していくことである。

むぎの会

一九六五年一
九・五 新潟地区ウタゴエ祭典

▲ウエトナムからの手紙▼（黒沢参吉）

九・二五 新津移動公演

▲ウエトナムからの手紙▼

▲呼びかけ▼（構成・郡山勝利）

▲その日はいつか▼（岸三吉・朗読）

一〇・一五 日朝黒崎支部結成大会

▲呼びかけ▼

▲ひろしまの空▼（朗誦）

一〇・一七 県ウタゴエ祭典

▲ひろしまの空▼

一一・二五 朝鮮帰国船歓送会

▲金正一が歩いた▼（黒沢参吉）

一一・一八 新津市ハタびらき

▲未来の市民▼（増岡敏和詩集より構成・

野口行男）

一一・二三 新潟市ハタびらき

▲未来の市民▼

一一・一八 黒崎労協ハタびらき

▲未来の市民▼

八・一七 西蒲教師の会合宿研（予定）

▲墓標▼（岸三吉詩集より構成・むぎ）

八・一七 西蒲教師の会合宿研（予定）

○請負的やつつけ仕事多く、主体的計画的活動がなかつたとの反省あり。

○二月～六月、全く無活動状態だつた。

○六月頃から若手にはつぱをかけられ漸く動きだした。

○六六年一〇月、こばやしひろし作▲こわれないものはなき▼によつて、新潟で初の単独公演をする。

○来年から春秋二回公演したい意向。

○現在会員一一名（男六・女五）

でくのぼうの会

一南部青年劇場の活動一

昨年一月から始まり、四月、十月と行なわれた南部青年劇場は通算二千余名の青年を集め、三百名の出演者といふ、名古屋南部での文化運動の中で大きな役割を果した。我々はこの中で、多くの経験を得るとともに、教訓を学び、九月四日の第四回のとりくみを進めている。

青年の文化要求は非常に強く、高い。芝居のサークルが生まれ、民謡、うたごえなどのサークルも組織され、自主的な活動を始めた。

第一回では七百名の青年を集め、すばらしい熱気の中で大成功に終つた。しかしこの青年の要求に対し、第二回、三回と続けたわけだが既存の文化サークル、民主団体の力が弱く、組織的に取り組むのが難しく、組織的に貸し手を確保し、自主的な運営が実現できず、実行委員会のとりくみも、一部のサークルの請負に頼つてしまい、停滞を生じ、それとともに、青年劇場で生まれたサークルの活動も停滞してしまつた。

文化サークルとしての運営も不慣れで、日曜日を地元に貸さないため、活動の方向を見失つてしまつた。各サークルを強い要求のもとに再度第四回への取り組みが始まつた。

第三回までの欠陥の討論の中から①実行委員会を巾の広いものにする②実行委員会を定期化し、ニュースを発行する③文化活動を中心とし、安易な政治宣伝の場としない。以上三点の方針のもとに、実行委員会の組織にのり出し、芝居、うた、バレー、写真など各方面のサークル十一大サークルが結集し、人々とした活動を始めた。

各サークルの交流を図るため、ニュースに各サークルの行事を紹介し、積極的に呼びかけ、その反省会を各サークルでやり、文化面での活動の中で交流を進めた。また「でくのぼうの会」では発足したばかりの演劇サークルへの脚本での援助をはじめ、日常活動などで援助を広げるなど、実行委員会を通じてのサークル間の援助、交流は活発に行なわれている。

名古屋は文化施設が乏しいため、会場難はかなり深刻であり、それに加えて「青少年不良化防止運動」により、教育委員会が青年の良化防止運動に着手し、公演直前には、千五百から二千名ちかい観客組織はできただと確信した。しかし結果はともい、常任を中心に、なお、二人の宣伝工作員を補充して、ほぼ一ヶ月間工作にあたり、公演直前には、千五百から二千名ちかい観客組織はできただと確信した。しかし結果は敗北した。しかし、これは、その後の検討によつて、この芝居の内容が、南朝鮮人民の抵抗を扱つたものであるというところから、それは広汎な日本人民によつても支持される（だから観にくる）であろうという希望的観測と、動員対象となつた民主団体、労働組合、文化団体などの、不渡手形的な約束が、劇団にとつては、とらぬ狸の皮算用的にうけられたということが云えたのであつた。

エネルギーを燃やし、ロビーでは、リアリズム写真集団や地元絵画サークルの作品を展示するなど、総合文化祭典の夢は、ますますふくらんでゆく。

劇団労働芸術劇場

六六年上半期の最初の仕事は、劇団の第五回公演「朴達の裁判」であった。品川公会堂で、五月十三、十四日の二日間、ステージで、観客八百名を集めた。稽古見学で顔を見せた原作者の金達寿さんは、この作品が、あまり普及されておらない場合から云つて、観客動員が心配ですと云われた。逆に、劇団はその文学的価値から云つても外れのないものとおもい、常任を中心に、なお、二人の宣伝工作員を補充して、ほぼ一ヶ月間工作にあたり、公演直前には、千五百から二千名ちかい観客組織はできただと確信した。しかし結果は敗北した。しかし、これは、その後の検討によつて、この芝居の内容が、南朝鮮人民の抵抗を扱つたものであるというところから、それは広汎な日本人民によつても支持される（だから観にくる）であろうという希望的観測と、動員対象となつた民主団体、労働組合、文化団体などの、不渡手形的な約束が、劇団にとつては、とらぬ狸の皮算用的にうけられたということが云えたのであつた。

しかし、そのことが判つて、劇団の弱さとしてはね返つてきて、悔いていない。むしろ「労芸」創立以来、殆んど初めての意識的な観客組織づくりの仕事として評価できており、手際、逆に、手のさしのべられてくることのその後の活動では、はつきり足がかりとして着実に前へすすみ出しているといえるのであつた。

舞台の評判は、総体的には、好評であつたと云えた。（批評は五月二十二日のアカヘタにものつた）。とくに劇団の若手が、やむを得ぬ事情から、可成の重要な役をうけもたされ、芝居のきびしい試練に耐える経験をもつたことが収穫であつた。

それと、舞台化では、スタッフ、キャストのめんで、劇団の現有勢力の倍以上もの人員を必要としたため、日頃親しい仲間の劇団、サークルなどの、つよい支持によつて実現をみたことが特徴的であつた。劇団では、稀の会、横浜ぶどう座、独立派、東演。サークルでは、ポケットシアター、南部合唱団、民青朝鮮青年同盟などから、なみなみでない協力をいただいた。この人たちに、まだ、劇団は十分なお札をしていない。お札というのは金銭的なことのみではなく、この人たちとの連けいをいつそう深めるということである。ただ、そのあと、ポケット・シアターにはその試演会に（チエホフのボードビル集上演）は果しえたのであつた。

ここで一言ふれねばならないのは、劇団が

氣持の上で、もつとも積極的に参加しているはずの、東リ演の、関東ブロックの諸劇団に対する、劇団の手のさしのべ方の不足や、不対する、劇団の手のさしのべ方の不足や、不無さ、これは全くの痛恨事であつたとおもう。時を同じくして、関東ブロックの諸劇団は、それぞれ自己の日程に忙殺されていたというのが、おもな理由だつたかも知れないが、なにか、お互い、相手を大切にし合うという気持ちが、まだ、十分実つてはいないのではないか。

「朴達」をみに来てもらえたといふ点では、舞芸小劇場の仲間をのぞいては、協同劇団や士の会のちからづよいはげましを、十分にはもらえなかつたことが、一応、手前勝手なこととして、劇団内部では、うらみつらみの言葉で出ている。もちろん、時と場所をかえれば、そのまま、われわれ労芸にも、かえつてくることなのだが。これは、今后、ゆつくり話合うべきことの様だ。

「朴達」公演のあと、劇団は、東労演の、

春の演劇行動（六月三日・四日）に参加した。春の演劇行動（六月三日・四日）に参加した。稽古期間のことなども考へて、前に上演したことのある、「ベトナム解放の炎」を再演した。作者（荒井敬亮）と演出者（津村雪雄）の打合せて、かなり推進したのだが、舞台形象化では、まだまだ未熟であつたことが、合評会で指摘された。その春の行動には、劇団員はほぼ全員参加できたのだが、劇団員の手から外へひろげるというところまでは、ちか

らがよびかねたと云えただろう。

このあと、劇団は、めまぐるしい日程には

いる。

六月二十五日。南部歌ごえ品川集会。七月五日。同じく太田集会。これには、時事劇

劇「きちがい病院」（植草重信作）を上演。七月七日には、「平和と民主主義と文化を守る」品川集会に、「ベトナム解放の炎」。

さいどに、七月二十九日三十日、世田谷と太田の両会場での、「原爆記念の夕」に、創作、「ピカ（原爆）の蔭から」。

の中で、集会の中心的課題として訴えることができたということ。これは芝居をしたわれわれにとつても新たな発見であつた。脚本としてもそれはすぐれていた。書き上げられた順序としては、文化戦線創作委員会の大垣肇、小関智弘、荒井敬亮の三人の討議によって生れ、実際には一定の責任で、小関智弘の手によつて書かれたものである。ここに、この作品を紹介するゆとりをもたないのは残念だが、短い期間の稽古の中でも、それは、内容からくる手堅い実りを見せたのであつた。

実際の上演にあたつては、当然のことながら、文化戦線協同のしどう面もあつた。作曲の小平時之助、南部合唱団の歌のバッケアップ。演出、演技は、芳芸が担当した。照明には稻の会が救援にかけつけた。世田谷と太田の二ヶ所での参加者が、ほぼ、九百名。若い人たちが多くつた。夏のヴァケーションで、土曜の夜、海辺へ遠のりをする青春もあれば、被爆者の劇に、ひとみをねらす青春もあるのだつた。

劇団は、きょうから仕事として、秋（十一月）の公演、東京争議団物語（S.S.製薬の斗争）の準備にかかる。執筆陣は、荒井敬亮、相沢嘉久治、それに執筆大垣肇の陳容だが、この程荒井による資料稿ができるがつた。劇団は、一そく、南部文化戦線の強化にからをそそぐ。劇団は、これまでしてきた様に、南部の演劇サークルの育成におしみない暖かい手をさしのべる。「朴達」公演の、きびし

い赤字負担の中で、一そく、劇団員の団結をちかいあつてゆく。そして何はともあれ仲間をもつとふやさなければというしどがある。

仙台小劇場

一九六五年一六年

一二・一二 田尻町

一・一六 名取市

一・二三 河南町

一・三〇 栗駒町

二・五 志津川町

二・一三 丸森町

一・一五 成人の日記念公演（柴田町）

△ 貞婦表彰△ 上演

四・三 山形労働者演劇祭参加

△ 貞婦表彰△ 上演

△ 芽ぶき△ 上演

公演外の主な活動

一・八・九 第六回総会

東リ演活動

一・一三 新年交流会

東リ演運営委員会（川崎）出席

二・一九・二〇 東リ演創作部会（静岡）

△ 陸橋△ 現地調査（七名参加）

七・二三 東リ演運営委員会（名古屋）出席

劇団からつかせ△ 陸橋△

名演例会△ 五〇年目の太陽△ 觀劇

一月・二月の活動
県の社会教育課からの依頼により、△ 貞婦表彰△ と△ 次郎案山子△ をもつて、毎週日曜日、地方公演として、県内各地をまわる。

これは、県の青年演劇研究講座として農村の青年団活動中心の演劇サークルの育成として、毎年の行事である。劇団では、この場を通じて、農村の演劇サークルと連絡をとり、県内の演劇活動の実体をつかみ、これらのサークルと直接結びついて、我々の普及活動を抜けようということで取り組んでいる。

今後、劇団としてこの活動で、県内の演劇活動を具体的に、より強くしていくことが大きな課題となつてゐる。

この地方公演中、二月一二日の簡保労組二〇周年記念公演として、△ 果ばなれ△ を上演した。これは、この職場から劇団に来ている劇団員の積極的な働きかけもあり、大きな成果を得た。現在、職場の中に劇団サークル結成の動きがあり、劇団の稽古を見学に来て

いる

四月二・三日の山形労働者演劇祭典に参加要請があり、この祭典に△ 芽ぶき△ をもつて参加する。

東リ演の創作部会で討議された△ 芽ぶき△ の問題点を作者を中心にして劇団で検討し、改稿して上演することになり、一ヶ月の中に改稿し、

舞台をつくるという非常に急がしい稽古体制となつた。

この山形の祭典には、昨年は京浜協同劇団と共に参加し、東リ演の東北ブロックの活動として、一つの大好きな役割を果している。この活動を宮城県の職場演劇協議会とも連絡をとりながら、東北ブロックの中心的な活動の軸として結集する方向で取り組んでいく。

四月以後の活動

第二回公演△陸橋▽を七月下旬を目標にとりかかつたが、キャストの不足、舞台をより以上質の高いものにということがあり、また、

一月からの急がしい日程に劇団が慣れていたことともあってか公演体制にとりかかる具体的な準備が遅れたこともあって、九月一日に公演を延期し、現在それに向つて全面的に取り組んでいる。

以上のよう、この半年の活動状況をみると、かえつてみると、一月から三月の忙がしい日程を消化しての気づかれ、旅づかれ、稽古づかれが生じて、その後の活動に大きくひびき、活動が急がしくなるとそれについて行けなくなりという劇団の弱点が具体的に現われてきました。例えば、毎年何らかのかたちで参加して来たメーテー前夜祭や昨年参加して出した母親大会等に取り組めず、これらの集会を犠牲にして取り組んだ△陸橋▽公演が、七

月から九月に延期せざるを得なくなつたといいう現象がそれである。

仙台の演劇状況

このことは、今年の総会で討議された劇団の力を強め、あらゆる困難に耐え得る劇団に、劇団員に成長し、それを保障する劇団の組織、五〇名の劇団員をという総会資料に示された課題であり、今すぐそれにとしかからなければならぬといふことを肌身で感じ、これら上質の高い良い舞台をつくるためにも、九月一〇日の△陸橋▽公演の成功へと努力し、活動を進めていきます。

職演協の動き

春の祭典は各サークルの自主的活動があつてとりくまなかつた。

劇研あさんじやくが五月二六日△大つごり▽を第一回公演としてやり、これまでの職演祭の舞台から一步前進した真剣な熱っぽい舞台をみて注目されました。

また、劇研劇草の会は山形の劇研こまくさと交流をもち、職場サークルの県庁演劇サークルや労災病院サークルも、職場内外で自動的活動にとりくみを見せました。

ただ、ここで問題となるのは、これらの活動と相反し、職演協の委員会が一時中断してしまつたことは、今後の活動に検討を要する問題だらうと考えられます。

現在秋の演劇祭典にむけて委員会も動きだす現象がそれである。

し、取り組み出したところです。

仙台の演劇状況

現在の状況の中で大きい意味をもつてゐるのは、仙台演劇集団の結成と、そのイニシアチブで今秋おこなわれる第三回宮城県芸術祭演劇部間の合同公演（第一回・プリストリー△危険な曲り角▽第二回・同△夜の訪来者▽第三回・ロマンローラン△愛と死との戯れ▽）です。在仙の古い劇団であるドラ、鈍等が右の合同公演の経緯の中で合同して生まれた仙台演劇集団については、「新劇」八月号掲載の石井昌光氏の記事を参照すればわかるよう

に、宮城県芸術協会のテコ入れがあるもののようにあります。

芸術協会といふのは、山形の芸文会議や神奈川の同様の性格の組織で、年間三〇〇万の予算中一五〇万を地元新聞社、電力会社、銀行、県、市からの寄附にあおりでいます。演劇部門に限らず、例えばつい先ごろ県議会で青年、婦人団体にそれぞれ一〇〇万の補助金を出すよう決議したといふように、これらの組織をからめ手でかかえこもうといふ動きが活発であります。石井氏の文中にある「年に一度の祭り」というなら、切符を売つたり広告をとつたりして上演費用をしぼり出さなくて資金援助があるといふなら一緒にやつてもいい」という劇団がわの姿勢に吸着したとみられる訳です。

とにかくこうした動きは、客観的にみて仙台小劇場を孤立させる効果を生んでいます。市内六劇団中有力なのは演劇集団、民衆劇場そして仙台小劇場ですが、民衆劇場が統合されてしまうと仙台小劇場はかなり困難な立場に追いこされます。

民衆劇場は秋の合同公演に参加しており、仙台小劇場も仙台の演劇状況を考えあわせて演技者を参加させていますが、民衆劇場とはピックアップチームをつくればいいという従来のやり方を改め、実質的な合同公演にするよう、劇団交流会を開く、演出方針を三劇団の全員に公開するという仙台小劇場の提案を支持してもらいたい、連携と信頼をふかめています。

基本的には、仙台小劇場が眞に観客の中に創造と運動の成果を定着させることで、他の劇団の絶対的な信頼をよせられる強力な集団に成長することですが、当面合同公演にそつぽを向くのでなく、参加する演技者を励まし、仙台小劇場の立場を守りつつ、この「運動」の背後を注視していくとおもいます。

劇 团 静 芸

1. 劇団の二月総会以降の活動は総会決定を実践する方向で取組されました。劇団活動の主なものを挙げると次のようにになります。

上演の思想をにちうちとして新二の行動線

①「ひとりっ子」(こばやしひろし脚色)

山崎欣太演出は昨年12月に公演したものですが、その総括の上にたつて演出に山崎欣太が当たり、上演の構想をより明確に具体化する努力が払われました。

② それぞれの公演について個別的に問題点を探つてみたいとおもいます

③ 「ひとりっ子」(こばやしひろし脚色)

上演の思想をにちうちとして新二の行動線

この上演は劇団はぐるまの「ひとりっ子」演出者松岡直太郎さんから「第一回上演よりこまかくなつてゐるが、のびのびとしたものがなくなつてゐる。俳優の演技が生硬である。母親との扱いは、否定的な意味ではなく、疑問がある」と批評されました。

この公演の大きな問題として普及の弱さが

- ④ 「ひとりっ子」公演(3月28日、静岡市民演劇祭参加、静岡市公会堂)
⑤ 「三家福」公演(4月6日、伊東市主催・伊東市民会館)
⑥ 「カンカラ広場にあつまれ」公演(6月5日、第31回公演、静岡市公会堂)
⑦ 「牛鬼退治」公演(7月16日、劇団八期生卒業公演、静岡県民会館)
⑧ 第一回静岡県演劇セミナー開催(6月25~26日、静岡演劇音楽センター)
⑨ 「つぶてとかがり火」執筆活動

劇団にとつては昨年の活動に較べて停滞を打破る活発な活動を展開し得たと云えるとおもいます。一ヶ月一回の公演活動は、相当な困難をともない、無理が重なつてゐることも事実ですが、現在の情勢、人民の斗争のテンポに成長することですが、当面合同公演にそつぽを向くのでなく、参加する演技者を励まし、仙台小劇場の立場を守りつつ、この「運動」の背後を注視していくとおもいます。

舞台美術の点では第一回上演より大きく改善されました。生活の場としての視点(母親とみの労働によつて生活が支えられていると云う特徴など)、貫通行動をより積極的にたどるために、母親の行動を明確に印象づける必要から、上手の台所から風呂場へのひろがりを舞台上にのせたこと、外庭と家の内部を等々によつて安定した舞台が構築されました。

この上演は劇団はぐるまの「ひとりっ子」演出者松岡直太郎さんから「第一回上演よりこまかくなつてゐるが、のびのびとしたものがなくなつてゐる。俳優の演技が生硬である。母親との扱いは、否定的な意味ではなく、疑問がある」と批評されました。

を中心して、その対立行動としての父親、自衛隊幹部、市会議員を対置させ、その基本的な葛藤の中で母親や隣家の娘を位置づける、といふ第一回の公演の構想は、第二回目の上演においても貫ぬかれました。それは特に母親の役割を位置づける上で基本的な観点となるものでした。稽古の中で重点が置かれたのは、新二の積極的な姿勢を明確にすること、父親と母親の関係を日常的な関係の中で明確にすること、隣家の娘を労働者の形象として明確にすること、などでした。これは、上演が母親とみの行動線に傾斜して上演の思想が不明確になる弱点をさけるために特に強調された点です。

舞台美術の点では第一回上演より大きく改善されました。生活の場としての視点(母親とみの労働によつて生活が支えられていると云う特徴など)、貫通行動をより積極的にたどるために、母親の行動を明確に印象づける必要から、上手の台所から風呂場へのひろがりを舞台上にのせたこと、外庭と家の内部を等々によつて安定した舞台が構築されました。

指摘されました。前回千二百の観客動員を考
えると、八百の観客動員にとどまつたことは
普及の構想・方針が曖昧だつたために団内の
不統一があつたためで、その弱点が反映した
と考えられます。

②「ひとり子」公演の十日後に「三家福伊東公演・（第五回公演・丘揚作・秋野政子演出）が行われました。伊東市民会館のこけら落しに招かれたもので、会場のスペースに合わせるために、新しく装置が組まれました。県内では浜松市民会館と同様、舞台のスペースも広く、設備もボーラン式の照明など近代的な設備を誇つている劇場で、七期生を中心とした公演では全力を尽して成功をかちとりました。「三家福」は四場の転換があり、ドラマの流れから短時間であればあるほどよい芝居ですから、少しスマッシュでこなすのは容易ではありませんが、四回上演によつてスムーズな転換の自信をもつことができ、創造活動の積み重ねの必要さを知る貴重な経験を得ることができました。

②第51回公演は山崎欣太が「つぶてとかがり火」執筆のために上京しなければならぬなり、短期間の準備で上演しなければならぬことや、未組織労働者の組織化が依然として重要な課題であると云うことから「カンカラ広場にあつまれ」が決定されました。

「カンカラ広場にあつまれ」（山崎欣太作・演出）は再演とは云え、初演に参加した劇団員は僅か数人であつたにもかかわらず、その

内容において働く者の立場をはつきりと打出している」この作品をとりあげることは、「三家福」と同様教育的観点からもふさわしいと云うことから、好個の作品として選ばれました。四国の宇和島の「牛鬼祭り」に取材したこのドラマは、太鼓や踊りにはじまる村祭りによつて来た長者が農民の暮らしの前に化けの皮

創造と普及の構想・方針が充分一致せず、加えて指導部が解体状態にあつた為に、初演に及ぶ成果をあげることは出来ませんでした。上演をやつと当日までにまとめることが精ぱいで、木工の現場労働者からは「生活ががんばれ」と痛烈な批判が加えられました。未組織労働者の民主的階級的強化と云う課題にこなれるべき普及活動は低調に終り、公演後の国鉄労働者との交流会で出された「もつと俺たちの中へ入つて来てくれ」という要求が、劇団の現在の弱点をはつきりえぐり出しました。この公演は統一劇場静岡公演班が全員観劇し、公演後の交流会では「この作品の積極的な意図に学び、われわれも未組織労働者の中へもつともつと入つていきたい、共にがんばらう」という激励をうけました。

をはがされやつつけられてしまうといふあらすじがわかり易く大衆的に描き出されています。この作品は「天満のトラやん」同様、闘いの要請にこたえて三年前に創作されたものですが、現在の小選挙区制反対の斗いの鋭い武器になり得るみづみづしさを持つています。上演は四日前に主役の二人が交通事故をおこすと云う困難な中で、ただちに代役をたててかちとられました。大部分の人が初舞台、20回余りの立稽古、主役二人の代役の条件から考えれば大きな混乱もなく上演できることは人期生の努力はもちろんですが、劇団全体がスタッフの仕事をはじめとして相当な力を注いだことによるものでした。

上演によつていつそうこの作品のすぐれた点が再認識された同時に、今后何回かの上演をかちとる中で、もつとわかり易く、もつと豊かな形象化がすゝめられなければならぬでしょう。

⑤第一回静岡県演劇セミナーは東リ演静岡プロツクの静芸・からつかせ・つくしの会の三団体を中心実行委員会を組織して計画実施されました。七団体三十数名の参加で、それぞれが直面している問題が真剣に討議され、交流が深められました。特に静大演研、薬大演研の学生演劇サークルの参加、天龍市「いづみ」のようなこれまで全然交流のなかつたサークルが参加したことは大きな成果でした。第一回県演劇セミナーは県演劇連絡協議会（副会長・事務局長を劇団から送つて

いる)の活動との調整など問題はあります。が、東リ演静岡ブロックの活動として今後が期待できるとおもいます。

②以上の活動と平行して「つぶてとかがり火」執筆活動が東京芸術座の応援を得てすゝめられました。現在第一稿が仕上げの段階に来ています。(東京芸術座は今秋上演を決定している)この作品はすでに数年の準備を経ており、何回か公演を延期してきましたが、二十周年を迎えるとしている私たちにとって、劇団活動の総決算として取り組み、観客の期待にこたえなければならぬとおもいます。早ければ今秋、遅くとも来春には上演すべく準備をすゝめています。(三幕十三景)

これらの活動の他に、3・20闘争参加、4・30メーデー前夜祭出演、6・24小選挙区制反対集会出演、7・7ゴーリキ一歿後30周年記念集会出演、7・28県連総会出演、7・31静岡地区争議団共闘会議出演など詩朗読を中心とした活動を積極的に行ってきました。

3. 上半期の活動は公演の回数を量的に増やすと云う点ではこれまでにない前進がありましたが、劇団の団結の強化の問題、質の向上の問題、普及活動における問題は依然として劇団のかかえてくる大きな課題です。アメリカ帝国主義によるベトナムにおける侵略戦争の拡大、小選挙区制はじめとする米日反動勢力のいつそアーファンショ化と合理

化の強行など矛盾はますます激化し、緊迫した事態を迎えて、われわれの活動はますます重要になつてきました。

静岡地区でも静岡相互銀行労組、葵々クリーク組などへの弾圧、警察権力の介入、分裂攻撃などがあいつぎ、劇団員の職場でも労働強化や配転が目にみえて強まつて来ました。

七月二十五日劇団員の西崎清子がおかめ製パン(従業員七・八十名の典型的な小企業で未組織)を突然理由もなく不当解雇されました。時間短縮による実質賃金切下げの合理化攻撃と期を一にして、職場の活動家を追い出そうとする意図をむき出して来ています。しかも理由を追求すると不法侵入だと一一〇番に電話して威嚇し、暴力で事務所からひきづり出そうとするなど、日茶苦茶な狂暴なやり方です。合理化に反対し、働く者の生活と権利を断固として守りぬき、不当解雇を撤回させるためにただちに「守る会」を結成、争議団共斗にも参加して法廷斗争でも徹底的に斗うことになりました。

舞芸小劇場

職場の関係で第三回東リ演総会には参加できなかつた。

総会の決定に対しても、運営委員会も劇団も、討議や学習を組織することができず、しきなかつた。たがつて方針の徹底、決定の実践も劇団活動にくみこまれないまま、第四回総会にのぞむ。この点を正直に報告しておきたいとおもう。「黙秘」の稽古、「火だね」初稿の執筆にはじつて一ヶ月目に東リ演総会が開かれていた。

「黙秘」は一九六五年一〇月一二・一三・

一四と民青東京演劇隊「こむぎ」の協力で、一二日民青かしきり、第四回公演を一三・一四ともつた。

1. 一八〇〇名の動員に成功、前回第三回「部品」の八〇〇名にくらべ、画期的成果をあげた。
2. 正剤的に、芝居をはじめてみると青年労働者を結集した。

にとつてますます有利に敵にとつてますます不利になつてていることのあらわれです。われが直面している課題は現在の劇団の主体的なちからを考えると容易ならざる課題ですが、全劇団員の創意とエネルギーを結集して勇敢に立向う決意です。

(西慎太)

3 黙秘一七番の革命的人間像に対する共感

加強く得田

4.
「黙秘」のような革命闘争をえがいた作品を、もつと普及してほしいという要求と共に、反面、職場をえがいた作品をとりあげてくれといふ要求が強くてた。
「黙秘」は、劇団を組織的にも思想的にも強め、稽古と上演の過程で四人の劇団員をむかえ、こういう活動をやれば大衆から支持されると、劇団を強くするといふ確信をひとりひとりのものにした。

そのあとひきつづいて再演を考えたが、オルグ体制と人員（キャスト）の面で実現しなかつた。

劇団一月総会（六五年度）では、「黙秘」のあと、四、五、六月に稽古していく「巣ばなれ」の職場、地域への一月、一二月移動公演を決定していくのだが、メンバーのいれかえ、退団等でやれる体制なく、そのため一〇月以後はブランクがつづき、「火だね」の年内脱稿のおくれとあいまつて、大衆的な忘年会、カンペニヤ公演用に、落語と「列外三名」（ラジオ中国）をつくつて、'65年をおえた。

一九六六年一月一〇日から三日間にわたつて第五回劇団総会が開かれた。
米日二つの敵の反動文化とたたかう、'66年度の劇団の方針が決定され、具体的な計画が示された。

年内三五名の劇団員にすることから、創造

(質的にも量的にも)、組織、財政面の強化、そのほかにも、民主的文化運動昂揚への参加、東リ演、新劇人会議の発展、民主組織との共斗、労組、サークル、その他グループの創造活動への協力、援助、組織化、文化活動者との交流、連絡会議のようなものをつくること……反税闘争と、たくさんのことがあるね。

「ん」から学んだ「江戸つ子八つあん」の創作
はじめてのことでもあり、苦労してもおも
うように進まない。一四月末、劇団は深刻
な気持で中間総括をもつた。
なぜ一月総会で決めたことがやれないのか、
どんな小さくとも、いま発展させられる前進
面はないか、真剣に話されていつた。

「火をね」初稿（五月末上演）　「火をね」上演
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10- 11 12

カンペニヤ 第五回公演「火 カンペニヤ
小公演活動 だね」 稲古期間 小公演活動

右記のスケジュールで上半期（五月までの）
の活動にはいつた。くわしくは別紙公演ト一
タで出したのではぶくが、実際は上半期の
仕事が、創造、普及の両面で二ヶ月おくれて

七月末、遠せられた。
しかもこの間、五回公演に予定されていた
「火だね」が二稿、三稿の段階でいろいろ因
難がおこり、秋は事実上上演不可能になり、
今年度のスケジュールからはずさなければな
らないといふ事態もおきた。

一月に「列外三名」で二回のカンバニヤ公演を組織したきり、四月まで一回の公演ももてなかつた。

それに頼まれても、「例外三名」きりやれ
るレバもなかつた。小公演の作品もなかなか
次まつていかない、劇団息吹の「天満のとらや

団者も出した。義務感だけで、へきいきと観客の前に立てない問題、四日に一回の公演ではしんどい、創造に喜びを感じられない等、劇団方針の実践の面でいろいろ犠牲も出した。しかし、逆に二年がかりで苦労して劇団に復帰した者の力は大きいし、ひとつひとつ、劇団員の拡大もふくめて、自力で自分たちの問題を解決しながら、自主的自発的な活動スタイルが全員の身についてきた。

いろいろ欠陥はあるが、上半期前半のおかげで後半期でたちなおつていて、主要な側面は前進だつたと総括した。七月二四日以後夏休みにはいつて、第五回公演の内容企画についても現在運営委員会で検討され、後半期にはもう一つ質の高い、多面向的な活動がやれることはもう決まっている。

京浜協同劇團

- 一ヶ年（65・9～66・8）の仕事
 9・3～9／川演協ゼミナール
 • 5／東勤演交流会
 10・24／土の会と稽古場交流会
 10・25／仙台職演祭へ郡山、中沢
 11・5／三家福・東勤演
 11・6／三家福・県演劇フェスティバル
 11・8／つをえて下さい・日朝友好祭
 11・18～21／傷だらけの天使・第十二回公演

- | | | | |
|------|---------------------------------|----|----|
| 1・9 | / 東リ演運営委員会・川崎 | 12 | 12 |
| 1・24 | / 25 / 傷だらけの天使・東京公演・九段会館
集い | 13 | 13 |
| 1・25 | / 11期生卒業発表・川向う他 | 1 | 1 |
| 2・5 | / 7 / スキー交流会・大町スキー場 | 2 | 2 |
| 2・18 | / 12期生入所 | 2 | 2 |
| 2・19 | / 20 / 東リ演創作部会・担当者会議・
静岡 | 1 | 1 |
| 2・21 | / 劇団定期総会 | 2 | 2 |
| 2・25 | / 真土村一揆・稽古開始 | 13 | 13 |
| 3・2 | / 3 / 山形勤労者演劇祭へ黒沢 | 14 | 14 |
| 4・24 | / 真土村一揆・現地調査 | 16 | 16 |
| 4・26 | / バルファン川の歌声を聞く・県民育
一人人集会 | 21 | 21 |
| 5・14 | / 真土を語る会・川崎 | 12 | 12 |
| 6・4 | / 貞婦表彰・東劇演春の演劇行動・同
シンボジウムへ黒沢 | 13 | 13 |
| 6・16 | / 19 / 真ユ村一揆・第十三回公演・労
働会館 | 14 | 14 |
| 6・18 | / 東リ演運営委員会・川崎 | 15 | 15 |
| 6・27 | / 28 / 真ユ村一揆・東京公演・九段会
館 | 16 | 16 |
| 7・8 | / 真土村一揆・横浜公演・青少年ホー
ル | 17 | 17 |
| 7・17 | / 真ユ村一 | 18 | 18 |
| 7・17 | / 平塚公演・市民センタ | 19 | 19 |

初めての大きな仕事

作者が十五年前から書きたい願望で温めて
きたこの作品は、三幕十四景、登場人物七〇人
に及ぶ規模で吾々の前にあらわれた。劇団の
総力を上げた上に、よこはま青年座、横
船はぐるま、すすめる会、労芸、土の会、妻
の会、つくしの会七集団から二〇人の応援を
仰ぐことになつた。又、美術、音楽、照明、
殺陣等にも、名古屋演集、新日音、加藤辻本
照明、前進座の協力があつてこそできた仕事
である。また、川崎、東京、横浜、平塚四都
市十一ステージという劇団創立以来の公演計
画の拡大も、現地実行委員会の並々ならぬ
とりくみによつて保障された。このしことの
最も巨大な教訓は、仲間の連帯の偉大さを肌
にしみて知つた、ということである。

観客に届けるべきもの

真土村一揆は明治初年の、しかも吾々の郷土のたたかいである。現地調査で部落内を案内してくれるのは伊藤元良の曾孫であり、衣裳係の団員に当時の風俗を教えてくれるのも冠彌右衛門の血をひくお婆さんだつた。この人々がひい爺さん、ひい婆さんの斗いをどんなに誇りにしているかは、例をあげるまでもないが平塚公演での客席の賑わいは、祖先への敬愛の爆発であつた、といえよう。

生かさず殺さずの状態に長くおかれた農民の、革命的なエネルギーをたくみに利用して維新一政権交替をやりとげた明治政府は、もとより農民の願望をうけいれる体制ではなく、本質的には松木の（カツコつきの進歩性もふくめて）思想的パックボーンを構成していくのであり、地券交付をめぐる土地の強奪、裁判の経緯等で農民がひしひし感じねばならなかつたのは、富国強兵を国是にかけた明治権力そのものであつた。この事件を「松木騒動」でなく「真土村一揆」とおされた根底も、吾々の舞台に労働者を中心とした観客大衆の今日の斗いに結節させる目標を与えたのも、その一点にある。

これは現代の歴史をたたかいによつてつくりつある吾々人民の側から、歴史の真実を明らかにしていくいくつかの試みー「郡山の立百姓」「石も又叫ぶ」「ばんどう騒乱記」「山城國一揆」などと並ぶしごとがあり、とにかく今体制側がお祭りにしようとしている明

治百年に対する吾々のアプローチであつた。

そしてそこには、合法非法の結合による斗争の英智があり、昭和初年まで続く借財返済のための部落共同体の團結があり、短期間に一万五千の助命署名をひろげる組織力があり、一人の裏切りもださなかつた一秘密がある。そして更に云えば、義民の子孫が口を揃えて「松木さんを悪人に描かないでくれ」と訴える事実が、松木の合理主義の遺産である发展した農協組織や、自民党の強い地盤ー真土部落と共にのこつてゐる。事態は複雑なものである。さながら現代のようだ。

根底の眼をくもらせることなく、その複雑さもあわせて届けようという願いが、吾々にはあつた。

舞台の創造について

具体的な創造活動は、教育大の田村氏による明治維新と農民のたたかいの二日間の講義にはじまり、各景の事件の描出と名称づけ等

のテーブル稽古の中で、この歴史的なたたかいでをいわゆる「一揆」や暴動でなく、はつきり階級斗争としておさえる方針がだされ、演出からは、人民の歴史をたたかいたる芝居にしよう、そのため吾々の思想性の低さと稚拙な表現力を克服しよう。とくに人物の生活にわけ入ることでの個性の把握、民族的なり

ズムとテンポの発見が求められた。

稽古過程の問題点は、客演者の決定のおくと創造を共にすることで、沢山の収穫を得ることができた。この交流が今後のかたい連帯

群衆場面が演技者の集中のわるさもあつて充

実しない、稽古場の狭さから全員が入りきれず他の創造から学びにくい、等々があるが、そしてそれらをカバーするために、演出班が果たすべき役割や、力のある演技者が援助すべき仕事が吾々の中でまだまだおくれてゐることも認めねばならないが、何といつても豊かな創造を保証する意欲と努力、さらに云えれば思想性の貧しさを指摘しないわけにはないものである。

本のよみの浅さ、極めて初步的なことでも、かも繰返されるダメ、日ごとの稽古に演技者としてもちこむものの乏しさ、なかなかの役づくりについての無関心、肉体的条件を改善していくための努力の欠如などにどう斗いをいどむかは、たとえば戯曲の内容の「政治的」把握が、いわば創造全コースの入口にしか立つていないので、という自觉とあいまつて劇団の創造思想として吾々の日常をつらぬかねばならない。

のために果たす役割は非常に大きいと思う。また、「真土一」を機会に創立以来の何人かの休団者が、劇団活動に復帰したことは、その人々の仕事の質の高さとあいまつて、全員への影響が小さくない。

「大変よかつた」へのチェックが圧倒的に多いことでのわかるように、はじてよろこんで迎えられたと云える。とくに、平塚公演におけるそれは吾々の予想や常識を超えてあらわれ舞台と観客についての吾々の新しい展望を示してくれた。荒っぽくいえば、演劇のもつ論理—教育的要素と、娯楽—芝居見物的要素（変な表現だが）の統一の重要さということになろう。真土の事件を現地平塚でやつたからといふ、おさえ方からは教訓をひきだしえないと吾々は考える。

戯曲に対する批判は、松木一権力の評価への疑問、農民をたたかいで立ちあがらせる生活の基盤とかれらのビジョンの不明確さ、そして前記の論理性と娛樂性の隔離ということころに集中している。その上で、郷土のたたかいで歴史を、もつと量産してほしいという声が、京浜労働者の今日の斗いを描けといふ声とあわせて出されていることを、吾々は真剣に考えねばならないだろう。

普及の面について
四会場十一ステージ、延六〇〇〇人という
観客と触れ合えたことは、劇団未曾有のこと

である。しかし手放して喜べない事実は表で示す如く、拠点である川崎と東京で失敗がつたといふことがある。

①明治近代化に対する祖先の斗争を、現在の吾々の斗争と、血つながつたものとしてとらえ、広く大衆のものとして受けついでいこう

②明治百年という反人民的歴史観に対する人民歴史観の具体的反撃

③郷土の歴史劇ということ

の三点を課題にすえての経営活動は、この課題をもつと鋭いものとして統一し、職場や地域、個別の人々にピッタリする型で応用できなかつたことが大きい問題として残る。

今までの経営班から経営センターとして三人に拡充し、別に二人のデスクをおいて強化した経営スタッフだつたが、点検、会議等も今までになくなされたにもかかわらず、二九〇〇の動員目標に一八〇〇しか果しえなかつた川崎公演においては、方法論としてのセンターの方針のよわさや、すぐに考えがちな物理的条件の無さということでは決して押えきれない深い問題がある。今までに比して全体的に相当のエネルギーを注入したこと、目標を超過達成したカマラードもあることも考へなければいけなかつたということ。吾々を支えてくれる観客が、どの様な状況の下に、どの様な

形でおかれ、どのような願いで日々を送つて
いるかと、どう把握がまだまだ不確かなこと。
状況に対して劇団がたちおかれていくるといふ
批判は、ここに大きな原因があつたようと思
われる。

しかし、観客の把握ということを唯單に「手
の問題」と考えることには大きな問題がある。
「観客を大切に」という劇団の創造上の課題
は、そのまま經營の仕事にもあてはめられる
のである。「手」ではなく「劇団の思想」
としてとらえる必要があろう。日常の中で広
範の人々に接し、学んだものを劇団に集中し
全体の徹底した努力で「創造者の眼」にまで
高めていくことが大切であり、それを全体で
保証することに積極的にとりくまなかつたと
を認めなくてはなるまい。

という観点にたつて次期公演一こばやしひ
ろし作「書けない黒板」一の基本線を

① 科学的分析の上にたつて観客を正確に
捉える。職場研究一職場一つ一つについて、
できたら職場から招いて全体で討論し合う
一をまんべんなくを行い、職場、地域、サーク
ルの状況分析を徹底的に行う。

② カマラードを有機的に活動させようよ
うに、その可能性を極限まで追求する。
③ 長期に亘つてのレパートリー計画の実
現を今年中に図りたい。

④ 行動隊の活用。

真土村一揆観客動員数

	川崎	東京	横浜	平塚	計
一般	1384	655	622		2661
当日	103	18	21		142
友の会	215	31	40		286
学生	14				14
招待	70	31	18		119
其他	22	5	25		52
計	1808	740	726	2700	
累計					5974

注 平塚公演については報告の詳細が入っていないが、公表された数字を採用した。整理の上で若干の変更があるかも知れません。

とで、カリキュラムの変更はいたかつた。はつきり不満としてのこつていて、日程の不安定のために、再考できなかつたのも残念だつた。声楽と肉体訓練については専門家を呼んで、声楽も半分しか果しえなかつた。担当者が前期の一人から四人に増えての共同でないが、担当者同志の話合いが満足にできなかつたよわさはある。しかし、たとえはもの言いの時等、四人四称の朗誦を聞くことができたことは成果として抑えられよう。いずれにしても、劇団創立以来の集大成としての「真土」に、若干ふりまわされたキャライもある。参加したことでの成果を一方で認めながらも九月二〇日の発表会に「巣ばなれ」を上演すべく直接創造課程に入つてこゝと/orする時、基礎訓練課程の半分以上を「真土」で過させたことは、大変な無理もあつたろう。劇団としては、この貴重な体験を今後の期生教育の場に生かさねばならない。

でくのぼうの会

はじめに
私たちが、東リ演へ正式に加盟したのは昨年十二月ですから、それ以後の活動報告とも考えらわれますが、しかし、実際には昨年の第五回合同ゼミから東リ演と密接に結びついて活動してきましたので、昭和四十年八月以後の活動報告をします。

一、公演活動

(1) 4/10 第三回南部青年劇場 構成劇
「怒りを炎に」

(2) / 12 第五回本公演
「キュー・ボラのある街」

(3) / 41 / 3 地本中学三年生を送る会上演
「キュー・ボラのある街」

(4) / 5 第六回本公演 「夕鶴」
「おばあさんと酒と役人と」

(5) / 7 名劇協合同公演
名古屋労演七月例会「50年目の太陽」出演

(6) // 9 第四回南部青年劇場「迷散」
10 第七回本公演 「未青年」

現在取組中のもの

期生教育について
応募者十九人。面接に来たのが十三人。現在は九人に減つてはいるが、出席の方もコンサートである。十二期生発足当初立案されたカリキュラムは、集団指導、劇団内講師制度ということで大きな期待がかげられたが、前半の座学の部分についてはほぼ消化しえたが途中から、「真土」への集中のために、変更をよぎなくされた。期生自身創造部門に直接参加したため、「真土」をやつてよかつたという評価の反面、マイナスとしての不満の声も相当に上つてている。カリキュラムはプランとしてはよかつたのだが、実行の上で、仲間づくりと劇団活動とのかね合いといふこと

二、公演以外の日常活動

12/1965年定期総会
41/1,6140
演劇教室

(4)「共済会」発足

ア 稲古場着工

活動の詳細について

昨年七月末の第四回本公演一會内で生まれた初の多幕物創作劇「陽光」上演後、私は東リ演合同セミに参加し、大きな励ましたと勵戦を受けて帰つてきました。そしてその方針と私たちの生き方を結びつけて何度も話し合つていくだで、それまで未定であつた第五回本公演のレバを「キューボラのある街」と決定し、これを成功させることができた。名実共に加盟することと意志統一して取り組みました。またこの活動と並行して、一月から始められた南部青年劇場一民青や民主的文化サークルが結集して行なう劇場の一の第三回が十月に行なわれ、私たちは、構成劇「怒りを炎に」をもつて参加したのです。

(1)「怒りを炎に」(第三回南部青年劇場)これは、南部にある三菱の下請工場に実際に起つた斗争を基に、その仲間と交流しつつ文芸部の栗木が構成したものでした。青年劇場で上演する迄、斗いの主人公の結婚式に行なつた後して今までの私たちの活動ではみられなかつた前進を示しました。

しかし、内容的には構成劇でありながら、構成詩的表現方法をとつたため、当日の劇的效果は不充分なものを感じました。青年

劇場に対する考え方にも少なからぬ軽視があつて、劇場全体にも、一種の政治宣伝の場となつて、普及の停滞と共に大きな課題を残しました。

(2)「キューボラのある街」(第五回本公演)

私たちの総力をあげて取り組んだ第五回本公演は、地元子供会の団体鑑賞も含めて、約八〇〇人の人たちを結集して大成功をおさめることができました。ステージごとにすぐ会場で合評会を行ないましたが、「今までの弱い生き方を反省した」「受験だけの生活は送りたくない」「民青の活動をやる気になつた」等々多くの素晴らしい発言が出されました。また、遠く浜松から

「からつかぜ」の仲間がかけつけてくれたのをはじめ、地元「演集」「はぐるま」の方々にも観てもらい、東リ演は私たちに血の通つた、切つても切れないものとなつたのです。「キューボラ…」の成功と東リ演への加盟ーそれは年末の総会でも出たようだ、私たち「若い集団」に誇りと責任と方針を、併せて「未青年」脚色上演、子供劇場の企画をも決定づけるものでした。

(3)「キューボラ…」再演

(地元中学三年生を送る会)

名古屋労演七月例会

演集が中心となつて、地元劇団協議会の力を結集して行なつた「五十年目の太陽」に演出生手、制作をはじめ、二名の出演者を出しました。公演の成功の中で、私たちも多人数の劇の演出の進め方、ペラン俳優の役づくり、スタッフのがつちりした進行

回本公演に引き続き、ここでも観客と一緒になつた感動的な舞台をつくることがでできたのです。

(4)「夕鶴」

(第六回本公演)

「おばあさんと酒と役人と」

春の本公演は、古典劇、近代劇の中から、演技の勉強が突つ込んでできる作品をといふことで、モリエール、チエーホフ等のももあがりましたが最終的に現在の体制と力量から、日本の代表的作品の一つである「夕鶴」と、日本の伝統芸能「狂言」を見直そりという立場から「おばあさんと酒と役人と」とを取り上げることに決めました。

「夕鶴」では厳しい生き方を、「狂言」では原狂言のたくましさを一定のレベルまで舞台化しましたが、第一課題の演技のレベルアップについては、まだまだ多くの問題を残しました。普及活動は、ぼつぼつ起りかけたアカ攻撃に対し、先手を打つ徹底的に地域に入り込み、一、六〇〇人を動員することができました。

(5)「五十年目の太陽」(名劇協同公演)

この劇の主人公ジンたちと全く同じ状態の三年生にみてもらつた訳ですが、劇の進行と共に、場ごとに拍子をそろえた拍手が休みなく続き、ヤジも好意的なものとなり終幕ではそれが最高潮となりました。第五

等多くのことを学びましたが、この合同公演に対する私たちの考え方が甘く、途中で一人の出演者が事実上参加できなくなりてしまつたことは、全体の進行にブレーキをかけ、厳しく自己批判しています。今後は、私たち自身の体制をもつとつくり出して、より積極的に参加することが課題として残ります。

これらの公演活動の中で、文芸部栗木による「未成年」脚色初稿ができ、第四回南部青年劇場の構想も明確なものとなりました。これにより、今年後半期の活動の骨格ができ、現在、その取り組みで連日、稽古に入っているところです。また九月に統一劇場、十一月に京芸と、南部での公演が準備され、多忙な中ではありますが交流を持つよう予定しています。

日常活動

昨年の定期総会後、新体制により日常活動も活発に展開されてきましたが、最近公演活動に流されてやや停滞しています。会員の納入状態の悪化(財政部)、現業労働者の会員拡大停滞(組織部)、新しい書き手、演出者の育成の遅れ(文芸・演出部)等々、又「友の会」の準備活動もストップしています。しかし、東リ演、印刷、労演等は仕事量も多く具体的なので、非常に活発に進んでいます。(1) 演劇教室 役者としての基本的な訓練をするためと、

他サークルの演劇指導者養成のため、東京演劇ゼミナーで三年間勉強してきた池田を中心て演劇教室を開講した。特に今年の一月と六月を集中の月と決めて、体操、发声を含めた詩の朗読、エチュード等を行なつたが、若い会員も積極的に参加して成果を上げた。しかし、他サークルの参加者は不定期に一、二名でこれから課題であります。現在公演活動に追われて、独自の時間がほとんどない状態ですが、八月の稽古場完成を機に、稽古前の一定時間をとつたりして定着していく計画です。この教室の内容は、来年からの期生教育へ引きついでいくものです。

(2) 共済会制度

会員の経済的相互扶助を目的にして、毎月二百円の会費を出し生活資金の貸付等を行なうもので七月に発足しました。まだ財政的にうまく進んでいませんが、演劇集団としては新しいところまで、誇つていいと考えています。

(3) 稽古場建設

念願であつた稽古場を、六十万の予算で七月に着工しました。会員の土地を使つて、建坪十五坪、木造平屋建、總板張といふ内容の、いわば学校の一教室ぐらいたるものです。八月一日現在、ほぼ外観を完成し、中旬には完工の予定ですが、カンパ活動がやや遅れて、今のところ会員負担金も含めて十万円という状態です。しかし、

あるサークルから、二十円、三十円と集めた千数百円を送つてもらつたり、また天井板を寄附してくれるという話もあり、おそらくながら着々と進んでいます。完成したら俊工式と五周年記念を同時に行ない、父兄理解者、大工さんたちを招いて威勢よく乾杯する予定です。そして、文字通り、南部の総合文化センターとしての役割を果していこうがんばっていきます。

以上、主な活動を書きつらねましたが、この一年間は、一口に言つて質量共に大きな飛躍の年であつたと思います。そして、この真価をはつきり示すのが、来る十月の、第七回本公演「未成年」と考えてします。東リ演中部セミ、三劇団交流会、合同セミ、総会を通じて兄弟と交流、学びつつ、千里馬の勢いで今後の活動にのぞんでいこうと、一同猛烈にファイトを燃やしているところです。

文責(栗木)

名古屋演劇集団

(一) 一年の動き

9月17日 訪中若尾正也帰国報告会 於中小企業センタ「三家福」。一五〇名
9月21日 祖父江高校文化祭 於同校講堂 「こわれた瓶」「三家福」

9月29・30日	劇団九月公演	於中小企 業センタ ー	早乙女勝元原作	相沢嘉久治脚 色	浦はじめ演出	「俺は雷」	一、〇〇〇名					
10月29日	名古屋劇團協議会合同公演	於名鉄ホ ール	丸子礼二（演集）水木文英 (劇団いづみ)	共同演出	「どん底」	一、 一〇〇名	「俺は雷」	一、〇〇〇名				
10月31日	沖縄、小笠原返還の夕	市公 会堂	薄井健蔵作	市村将之演出	「寅やん 沖縄へ行く」	三〇〇名	「夕饅」	「三家福」				
11月5日	小牧高校文化祭	於同校講堂	「三家福」	一、 一〇〇名	「三家福」	一、 一〇〇名	「夕饅」	「三家福」				
11月21日	第三期生終了公演	於労働会 館	市村特之演出	「おんにょろ盛衰記」	市公会堂	詩朗誦	一、 一〇〇名	「三家福」	六〇〇名			
12月10日	民育劇場	於市公会堂	「しんしゃく源氏物語」	四〇〇名	4月5日	劇団四月公演	於文化講堂	「キュー・ボラのある町」	一、 一〇〇名			
12月10日	民育劇場	於市公会堂	「俺 は雷」	七〇〇名	リリアン・ヘルマン作	浦はじめ演出	「キュー・ボラのある町」	一、 一〇〇名	「キュー・ボラのある町」	一、 一〇〇名		
12月19日	東海製鉄サークル文化祭	於同 校講堂	「俺は雷」	六〇〇名	4月24日	第一回名古屋市芸術劇場	於 文化講堂	「キュー・ボラのある町」	六〇〇名	「キュー・ボラのある町」	一、 一〇〇名	
12月19日	横須賀公民館	「三家福」	六〇〇名	4月28日	愛知県メーテー前夜祭	於市 公会堂	詩朗誦	二、 一〇〇名	「キュー・ボラのある町」	六〇〇名	「キュー・ボラのある町」	一、 一〇〇名
12月21日	劇団第五回演劇教室	於 市公会堂	演出若尾正也	「キュー・ボラのあ る街」	5月10日	第四期生開講	期生三〇名	「キュー・ボラのあ る街」	六〇〇名	「キュー・ボラのあ る街」	六〇〇名	
1月23日	知多民育ハッピング	於半田小 学校講堂	「俺は雷」	六〇〇名	5月21、22日	劇団すがお公演に協力	於桑名市光風中学校	「三家福」	四〇〇名	「キュー・ボラのあ る街」	六〇〇名	
1月28日	星城高校予習会	於同校講堂	「俺は雷」	六〇〇名	6月4、5日	第三回中部プロツクゼミ	於名古屋市半僧坊	参加者一一〇名	「キュー・ボラのあ る街」	六〇〇名	「キュー・ボラのあ る街」	六〇〇名
若尾正也演出	「夕饅」	一、 一〇〇名	鬼頭ちか子作	池永保夫演出	「寅やん沖縄 へ行く」	六〇〇名	6月11日	名古屋大学祭	於名大講堂	「島」	「ラインの監視」	一、 一〇〇名

(二) 上演活動の要点

① 「俺は雷」

名古屋劇團協議会合同公演「どん底」と併行して行われ、スタッフ、キャストの力がさかれ、稽古への集中の不足、稽古日数の不足（七月下旬～九月下旬）等、悪い条件が重なつたが、三月公演の「陸橋」をうけて、現代の若い労働者層のエネルギーを主題にしたテンポの早い作品は、自分達の身近な問題として受けとめられた。しかし若い層の劇団員がも一つ演技力を高めなければならないことが問題点として出た。

その後に幾度か移動公演をもつことが出来たのは、若々しさがあふれるこの作品の強さによるものがあつた。しかし移動作品には、セット、照明、出演者数共に少し大き過ぎ、財政負担を大きくした欠陥があつた。

「島」「ラインの監視」といつた作品と同時に若い労働者の今日の生き方を主題とする

こうした作品の上演は、観客からの要求も強く、劇団の上演レバの一つの系列となつて来た。本年も、秋の公演に「小麦色の仲間達」を上演する。

② 「キュー・ボラのある町」

子供（カニキ、サンキチ）の役について多くに取り上げることをためらつた、本年度のことも劇場（演劇教室）は、予想以上に中学生に強い共感を得る事ができた。昨年と同じく、最初から殆んどの役をダブルにして、予想される公演回数の増加にそなえた。

今年の失敗は、学校の学期末行事予定とうまく合致しなかつたために、文化講堂での予定を中止することになり財政的にも大きく負担をのこした。

③ 「ラインの監視」

年間のスケジュールの中で、あまり多場面でない、云つてみればオーネックスな劇作の手堅い作品も入れたいことから、三月公演に「ラインの監視」を決定した。若い層を主体とした「陸橋」「俺は雷」を演出してきた浦はじめが、比較的古い演技者を中心にしてこの演出に当つた。逆に秋の公演には「風浪」「島」を担当した若尾が「小麦色の仲間達」を担当する。こうしたことも演出者、演技の夫々の前進には役立つであろう。

④ 小公演

「トラン」の改作は依然続けられ、今後も発展させる。今年の中でも、特に「名交の寅やん」は職場の観客と極めて融合し多大の成

果をあげた。

詩の立体化として、中部ゼミで試演した「ムードのある詩」は全く試みに終つたが、今後完成させたい。「ヴエトナム人民を支援する夕」に上演した詩朗誦の背景の舞踏的構成は、公会堂の設備（照明）の活用と共に成功し、今後の一つの行き方を示した。

⑤ 合同公演

合同公演の是非については、「どん底」以来劇団内で再三討議されたが、劇団自体の活動にとつてはマイナス面が大きすぎるといふ意見が多く、合同公演をやる意義が不明確にしかとらえられないでいる。しかし七月の「五十年目の太陽」については、名古屋労演の例会といふことに支えられて成功したがまだ今後の合同公演に対しては、劇団間の意見は統一されていない。

「五十年目…」の上演運動の中から、名労演サークルを通じて、劇団の新しい観客組織のメドが出そうである。一方、劇団自身の後援会組織は、このために多少マイナスされている。

⑥ 劇団内組織

今年の初めから演技部門の連絡、訓練の必要から、部門に小組の組織を始め、四月頃に小組の組織を、劇団の組織の基本にする運動がおこつた。現在演技部五組（演出部二組）文芸部一組の八小組になつていて、

門に各自が二重に組織されていたが、それ

を改めて劇団の組織は各部（演出部、演技部、文芸部）その各部が小組に分れるようになり、経営部のない今の状態では、委員会として經營の担当をきめている。

又、運営委員会の他に、創造委員会をつくり、組織委員会も考えられたが、目下組織委員会は出来ていないし、創造委員会は実際の活動が出来ていない。問題は運営委と創造委が現在同じようなメンバーで組まれていてことにつけて、来年度の委員会組織について改善する必要がある。

⑦ 外部との交流

中部ブロックゼミは、今年も順調に実施したが、二年続いた同じ様なやり方が今後は発展的に改善されないとしけない。八月六、七日に行う第一回東リ演加盟劇団中部ブロックゼミナーを前進の突破口にしたい。

民主団体その他との連絡担当者をきめたことで、各団体との疎通も多少改善されてきたが、まだ不充分である。

名古屋劇団協議会での活動は、「どん底」「五十年目」を通じ、一層緊密に提携できるようになつてゐるが、まだ統一運動の母体となるには弱い。合同公演の意識を、創造的にも思想的にも発展させると同時に、協議会自身の改善を必要とする。（無活動の劇団のテコ入れ、新しい劇団の加盟）

(三) 期生教育

第三期生は、昨年十二月に修了し、約二十名

内、一〇名が劇団に入団

第四期生は五月十日に開講、期生担当者は

星野龍美、八月から終了公演準備(カンカラ)

廣場に集め(予定) 現在約三十名

(四) 本年下半期の予想 本年下半期の予想

東リ演説会後に、劇団の年間方針の中間点

検を行い、後半期の活動を強化する。

予定されている仕事は

10月29、30日 於名鉄ホール、「小麦色

の仲間達」 演出 若尾正也

12月3、4日 市芸術祭合同公演に協力

12月13、14日 第六回演劇教室「僕たち

のマーチ」 演出 浦はじめ

学校を主体とした移動公演に、「キュー

ボラのある町」「夕鶴」「三家福」「こわれ

た瓶」を用意、現在二三予定がある

全電通東京演劇集団 「太陽に向つて涙を流

すな」

米多幕ものの夕(2)／6月27・28日／九段会館

京浜協同劇団「真土村一揆」

東劇演ニユース41号は、現在右の演劇行動

の総括を作製中であることをつたえ、観客数

の少なかつたことに関する各団のとりくみ

の姿勢に、反省の必要があると問題提起して

いる。

そして秋の第4回演劇祭が、東京労演の10

周年記念行事の一環として両者の共催によつてひらくれることを報じてゐる。それによる

と一

※日時／11月15～20日(含舞台稽古)

※会場／赤坂公会堂

※会費／全日通し・200円

また出演予定は

日電三田 田井洋子「熱帯魚」

みちグループ「魔羅」

みちグループ 三好十郎「魔羅」

凸版演劇部・土の会合同 黒沢参吉「金魚と

人間と(仮題)」

全通演サ協 芳地隆介新作

全通演劇団 長谷川誠新作

劇団潮騒 隆冬二「転寝」チエホフ「悪党」

京浜協同劇団 黒沢参吉新作

劇団くろがね 小島康男「作造の話」

人民劇場 栗木英章「ガード下から」

独立派 林黒士「黒い太陽」

ぶどう 作品未定

一揆の会 作品未定

この他、東京地裁、税関査の会、劇団労芸

なども参加の可能性があり、書きおろしの創作

作劇も多く、いまから意欲的な舞台がたのし

み待たれる。

これには東京労演が、10周年といふこともあつて積極的にとりくみ、極力創作劇をやつてほしいとの要請を、「労演賞」の企画と共にだしてきたことも見のがせない力になつてゐる。

東 南 北 西

乙 ことしの合同演劇せ

ミは、創造を軸に一と
いうことで、果ばなれ

▽の公開稽古、從來の
精神的連帯の確認とい

うところから、方法上

の統一へ一步ふみこむ訳だが……

A 方法上の統一といふのは少し違うだろう。

Z 方法上の問題でいえば十集団十色のつくり

A 方があつていい筈だ。

Z そんなことは云うまでもないさ。しかし

A 現実認識を土台にした上演の超課題、役の

Z 貢通行動のつかみ方では、方法論として共

A 通にまさぐつていけるし、いく必要がある

Z だろう。

A ただし、そいつを観念的な形態にしてし

Z まう意味での統一なんかじや意味ないし、

A それ位ならむしろ、創造上の不統一・不一

Z 故よ、大いにおこれと云うべきだ。

Z そいつたんじや、劇団相互の学びあい

Z という風潮に水をさすこととなるぜ。

A それは、学ぶといふ中味が生きてつかま

Z えられていないからさ。観劇交流の大切さ

A は強調されるが、それ自体まだまだ運動論

Z 組織論中心の強調なんだから。

A Z 問題は、いつから當面でなくなるのか、

Z その奥へ入つていく保証が、運動論の向う

Z がわはあるのか、だよ。

乙 仲間の舞台を見て、ガーンとやられた、

その実感のあるときはいいよね、生き生き

してくるし、裸にもすぐなれる。

A 困るのは、そいつがひどいなあ、という

とき。ほんとに困る。

Z 仲間である以上、云わなきや、それは。

A Z 云えるかなあ、そいつが。

Z 同じ劇団なら云うだろう。最底そこがバ

A カバカやり合えなきや、それこそ困る。

Z A そりや同じ劇団には方法論としての統一

が、少くとも辿りつく目標として具体的に

あるけれど、東リ演ではそこまでまだない、

よ。世界観の一致はほほあるけれど。

Z 創立以来の中心点だからね、演劇リアリ

ズムの統一的な把握ということ。

A いま云つたように、劇団間の力値の格差

が客観的に判然してゐる場合は、学ぶ一提供

するみたいな関係ができるやすいが、ほほ同

じ力値の集団が互いに相手に批判をもつて

いる場合いや、自分たちの仕事に自信も

つてゐる場合、こいつは難しいな。

Z それは、劇団のカラーのちがいつもの

もある。あそこはああだが、うちはちがう

といつた……ね。

A 共存共栄か。いや良くも悪くもつと積

極的だ。僕はそういう疑問の出し方、斬り

こみ方がすごく必要におもえるんだが、受

ける方にしてみると、これもいい加減でや

つてゐる訳じやないし、根本のところには何

と云つたつて観客が支持してくれていると

いう部分があるんだな。

乙 そいつが切れになる。

A 又は陥し穴だね。観客に依拠するという

内容を、そこでスリ替えちゃ大変だ。オレ

は絶対変わるものかと腰をすえて、批判を

きいても、何のマシにもなるまい。

Z そう绝望したらどうにもならん。やつぱ

り仲間の舞台は極力みるべきだし、正当に

評価する作業はやつていかなきや……

A 絶望なんかするものか。東リ演そのもの

が始まつたばかり、交流なんて本当にはま

だおこつちやいないとおもつてゐるもの。

Z 観せてもらつてもあまり学ぶものはない

だろうとか、余計なこと云つて波風たてる

より、おめでとうと云つて帰つて帰つてこう、

とかいう考えは事実あるし、まずそいつを

変えないと……ということだな。

A 変るかね、簡単に。ボクは、観なかつた

ら大損した、という舞台をどこかがつくつ

てみせる、多分その辺から變るんだろうと

おもつてはいるんだな。

Z それじや、運動にならんよ。

A という料見がせつかちすぎるのさ。自信

もないヤツが、なびきあつてつくるもんじ

やないぜ、自信満々なヤツが一太刀浴びて

ウーン、畜生！と傷口

をみつめるところから

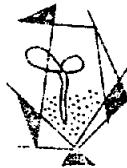
本ものの連帯も、創造

運動の回転もはじまる

筈だらう。

東 南 北 西

乙 うーん……。



関 東 プ ロ ッ ク の 現 状 と 問 題 点

京浜協同劇団、労働芸術劇場、舞芸小劇場、群馬中芸、新潟むぎの会、そして土の会の六劇団が関東ブロックを構成している。ブロックとしての活動は依然として弱いといわなければならぬ。群馬中芸、新潟むぎの会との直接連絡はブロックとしてまだ一度もとられていないことにもそれは示されている。東京を中心とする四劇団の日常的な接触も充分とはいえない。今年度計画された「関東ブロックゼミナー」も具体化されずに形態を変更せざるをえない状況にある。

そのことは基本的な問題として東リ演が劇団活動の中心として劇団の中に徹底しないことに理由がある。精神的な連帯、理念的な支柱とはあっていても、東リ演の創造、運動論が関東の演劇状況を見通すだけになつていないこと、しえないことなどがブロック活動を強化できない。特に東京の劇団にその問題は大きい。さらにいえば通常委劇団である土の会がその解説の先駆に立つことができないことも停滞させる原因がある。

しかし、いくつかの意図的などりくみが行

京浜協同劇団、労働芸術劇場、舞芸小劇場、新潟むぎの会、土の会の六劇団が関東ブロックを構成している。ブロックとしての活動は依然として弱いといわなければならぬ。群馬中芸、新潟むぎの会との直接連絡はブロックとしてまだ一度もとられていないことにもそれは示されている。東京を中心とする四劇団の日常的な接触も充分とはいえない。今年度計画された「関東ブロックゼミナー」も具体化されずに形態を変更せざるをえない状況にある。

(1) ブロック会議が定期的に開かれた。

毎月第一木曜日を定例として東リ演係(または代表者)による会議がもたれ、各劇団の活動の問題点が提起され、ブロックの活動計画を検討していくことは前進といえる。だが同時に六、七月が劇団の活動に追われて流されてしまったことが、ブロックゼミナーなどの現実化を不可能にした。さらにこの会議が在京四劇団のみで行なわれ、群馬、新潟の参加がえられず、またその連絡も必ずしも密になされなかつたことにも問題があつた。

(2) 東動演・東京労演の強化、提携がすすめられた。

東動演も今年四年目をむかえているが、その中にあって東リ演加盟劇団が重要な位置を占めていることはいうまでもない。東動演を主なる発表会としてのみ終わらせるのではなく(演劇行動・毎月の実行委員会など)日常的な活動を持続させることも成功があつてゐる。労演との関係も東動演を通して、また京浜協同劇団の東京公演にこゝで緊密化されようとしている。また労働芸術劇場が南部、土の会が北部、京浜協同劇団が南部、川崎と東動演も今年四年目をむかえているが、その中にあって東リ演加盟劇団が重要な位置を占めていることはいうまでもない。東動演を主なる発表会としてのみ終わらせるのではなく(演劇行動・毎月の実行委員会など)日常的な活動を持続させることも成功があつてゐる。労演との関係も東動演を通して、また京浜協同劇団の東京公演にこゝで緊密化されようとしている。また労働芸術劇場が南部、土の会が北部、京浜協同劇団が南部、川崎と

この点にも支障をきたす理由があった。とりくみの点と合わせてこの現実を直視した今後の活動が考えられねばならない。同時に互いの仕事を尊重し、創造を中心として交流を深めることが教訓としてとらえられる必要がある。

毎月第一木曜日を定例として東リ演係(または代表者)による会議がもたれ、各劇団の活動の問題点が提起され、ブロックの活動計画を検討していくことは前進といえる。だが同時に六、七月が劇団の活動に追われて流れてしまつたことが、ブロックゼミナーなどの現実化を不可能にした。さらにこの会議が在京四劇団のみで行なわれ、群馬、新潟の参加がえられず、またその連絡も必ずしも密になされなかつたことにも問題があつた。

(3) 各劇団の協力の具体化がある。

この中では、京浜協同劇団の東京公演に対する「ブロックゼミナー」は各劇団の交流を基礎にし、各劇団の上演作品を合評す

るという形態が考えられていたが実際の相互観劇が意図したように果たされなかつた。この定例ブロック会議を重視し、その活動が各劇団に対してもつてある責任を明きらかにしていかねばならない。

「ブロックゼミナー」は各劇団の交流を基礎にし、各劇団の上演作品を合評す

るという形態が考えられていたが実際の相互観劇が意図したように果たされなかつた。この定例ブロック会議を重視し、その活動が各劇団に対してもつてある責任を明きらかにしていかねばならない。

が創作劇を執筆したことは、今後の創造的な連帶へむかって一つの新しい前例を開いたものとして注目されてよいし、大切に扱うべき問題といえる。

(4) 組織拡大についても若干の前進をかちえた。

東劇演の共同行動、各劇団の独自活動および機関誌紙を通じての接触の中から、いくつかの仲間の劇団に東リ演への加盟をうたえられる素地がつくられつつある。ランダムにいえば、川口市民劇場、劇団くろがねのようないく玉県南で活動をつんでいる仲間、横浜アマ演で若いエネルギーを發揮しているよこはま青年座、十年の歴史をもつ甲府の劇団やまなみなどに、やや系統的な働きかけが続けられており、東京の諸地域に根をひろげていくいくつかの劇団に対しても、具体的な交流を軸に当面、機関誌「東リ演」によるよびかけをしていくとしている。

東リ演の兄弟、機関誌を武器にしよう！

演研「でくのぼうの会」
東リ演係 栗木英章

兄弟、日々健闘のことと思ひます。私たちの機関誌をより強力なものにするため意見を述べます。

第三号初ページの東西南北欄を読んで、私たちは自身、機関誌に対する他人まかせの弱い考え方を反省すると共に、今、合同ゼミと総会を迎えるこの時点で、各劇団が東リ演について徹底した討論と体制を強めることができることを、機関誌を軸にして進めていくことを、機関誌を武器にして進める

に含むことの是否、連絡活動のとりにくさ、群馬中芸に対する働きかけをどう具体化するかなどの問題を明らかにする必要を示している。

② 東リ演としてブロックが全劇団員の活動として定着できず、また依然として各劇団がそれぞれ孤立していいる状況が支配的である。活動の基盤、活動形態にかなりの差があり、そのことが互いに吟味されていない。特に東京地域が多くの専門劇団が存在しそのことを含めて演劇状況が形成されている現実を、東リ演と各劇団がどのように

(土の会 よしだはじめ)

展望をもって活動していくかが不明確であり、ならざるをえないこと。

群馬中芸に対する働きかけをどう具体化するかなどの問題を明瞭化にする必要を示している。中止となつた「ブロックゼミナール」は「拡大ブロック会議」として存在している。中止となつた「ブロックゼミナール」は「拡大ブロック会議」として存在している。中止となつた「ブロックゼミナール」は「拡大ブロック会議」として存在している。

総会後九月に開催されることになつてゐるが、そこで検討された問題点を中心に関東ブロックと各劇団がもつてゐる現実の状況を直視するところからその解説がなされねばならない。特に東京地域が多くの専門劇団が存在して存在している。

(土の会 よしだはじめ)

り、ならざるをえないこと。
などの問題を克服しなければならない議題として存在している。中止となつた「ブロックゼミナール」は「拡大ブロック会議」として存在している。中止となつた「ブロックゼミナール」は「拡大ブロック会議」として存在している。中止となつた「ブロックゼミナール」は「拡大ブロック会議」として存在している。

だろう。急がしい……公演が近くで……等々色々理由はあるだろうが、しかし、その底に流れている共同斗争への軽視、劇団工ゴは厳しく見つめなおさなければならないと思う。

急がしいときほど、その多面的な活動を他団へ反映させる必要があるし、そういう機関誌にしていかなければならぬ。

私たち集団は、昨年十二月、東リ演へ加盟するとき、何度も全体会議をもち、自分たちの生き方、集団の方向と結びつけて話し合い加盟決意しました。もちろん、現在弱点をあります。この討論から、機関誌代をきちんと納めること、原稿を通じて活動を機関誌に反映させるという活動を確立しつつあります。第三号でも、西リ演の仲間から貴重な意見が寄せられていますが、東西リ演の連帯も強化していくこうとする今、ほんとに今、私たちは東リ演を各集団全体のものにしなければならないと思います。そのためにも、私たちのさやかな経験と教訓から、次のことを提案します。

中部プロック 三劇団 交流会のこと



- 一 機関誌（例えば第一号の小林論文）をテキストにして集団学習をし、その中で創造問題も含めて東リ演の意義、方向、併せて機関誌の重要性を話し合う。
- 二 プロックゼミ、観劇交流をもつと活発化して、新しい層をも東リ演へ結集する。
- 三 集団の中で、東リ演係を二名以上確立し

て、団内の東リ演ニュースを発行したり、また原稿を通じて活動を反映させること、機関誌代を一週間以内に送る体制をつくること等明確にする。（団内で機関誌は現金・阜はぐるま）は、この交流会の前にひらくれ引換えを原則とする）

もちろん、いろいろあたりますとも言える

ことで、すぐ東リ演の活動が活発になるとは思えません。日常の創造、普及活動の中で東リ演が必要な存在となり、したがって機関誌もむさぼるように読むようになりますが、しかし、

の目指すものであると思ひますが、しかし、

こういうあたり前などをぬきにして、東リ演が全体の生き生きとしたものになることは

ないと思ひます。来る八月の合同ゼミ、総会でも、この機関誌に典型的にあらわれている

弱点について、突っ込んだ討論をしたいと思

います。

第三号でも、西リ演の仲間から貴重な意見が寄せられていますが、東西リ演の連帯も強化していくこうとする今、ほんとに今、私たちは東リ演を各集団全体のものにしなければならないと思います。そのためにも、私たちのさやかな経験と教訓から、次のことを提案します。

してもらい、各プロックの参考にしたいし、そのお願ひもしてきた。

三劇団（名古屋演集・でくのぼうの会・岐阜はぐるま）は、この交流会の前にひらくれ

た第3回中部プロック・ゼミ（6月4・5日）の中核であり、今回はその大衆的な大交流を基礎に、問題点をふかめ團結をかためようと意図が軸になっている。

日程は8月6日(土)夜が、若尾氏の挨拶、黒沢の「東リ演の役割」そののち10班にわかれ

ての分散交流会で、7日(日)は午前中はぐるま

「ヴエトナムの炎は消えない」でく「おばあさんと酒と役人と」演集「キューポラのある

街一終景」が上演され、今後こばやし氏の

「地方演劇の創造」についての講演。

つづく分散会は、演技・演出・文芸・美術

の部門別に約2時間かけ、そのうち各分散会

のまとめを全体でうけて終った。

こう書くと、別に変りばえもないようだ

が、三劇団百人かい仲間たちの結束した熱

気といい、上演交流のとりくみといい、「書けない黒板」ではないが、皆で伸びようとい

う課題が生きているのを、私は一番つよい

印象としてうけた。解決すべき諸問題は、こ

の土台の上でひろげられるものと思う。

関東が9月中、東北が9月9～11日の「陸橋」公演をはこんで、それぞれプロック集会

に出席した私の報告としては貴を果たしたことにならないし、実際あれほどの充実した中味は伝えきれないものである。

それはそれとして、次号の本誌にぜひ報告する。

戲曲「真土村一揆」讀後雜記



栗木英章 演研「でくのぼうの会」

京浜工業地帯を足場にして先進的な活動を続けていた京浜協同劇団が、代表者でもある作者黒沢氏の、十数年あたためてきた地元の「真土村一揆」を舞台化されたことに深い敬意を表します。東リ演では、劇団はぐるま等と共に、一貫して創作劇を重点的にとりあげ

府による優柔と弾圧の状況をリアルに描いてゐる。そして作者は、この作品のなかに日本の「近代化」の問題点を見ようとしている。しかし、それだけに、農民の指導者である冠彌右衛門が、対立者である長右衛門に匹敵するくらいの未来像をもつていなかつた点に、疑問が残つてしまつのである。

混乱——を感じてしまひます。作者は、確かに『河』のパンフレットに『真土村騒動録』予告のような形で、小文を書いていますが、その中に、「事件の内容を伝えるだけでも」とあったと記憶していきます。「騒動録」を「一換」にかえたのは何か意味があったかも知れませんが、数回読んだ限りでは、事実を

な励みと支えと、勉強になっています。
しかし、東リ演機関誌第三号に載った戯曲
を読んだとき、ある疑問と失望を感じずには

新聞批評としてはこれでよいのかも知れませんが、しかし考えてみると欠陥と後記されている面は素通りできない問題だと思います。別に、冠彌右衛門をバリバリの活動家として

作者独特的体臭のなんどんする作法で戯曲化した、何を訴えるのか明確でない「騒動録」。そのものだったよう思います。

いられませんでした。期待が大きかっただけに、その感も一方的な面もあるかも知れませんが、しかし、従来仲間の戯曲に対し、突っ込んだ討論や疑問が出されなかつたことを思うとき、卒直に出した方がいいと考えて自分の勉強不足を省みず感想を述べる次第です。舌足らずで、独断的なところは諒了承願います。

☆私たちに何を訴えようとしたのか？
六月二十四日付のアカハタで、菅井氏はこう言っています。

ぎりぎりのところで立ち向かっていったかが
真実感をもって迫つてこないのです。むしろ
大工の音五郎や、博徒倉吉に作者の情熱が感
じられ、しかも、音五郎なら音五郎が、この
一揆に加わってくる過程に必然性が劣しいた
め、浮いてしまっているのです。だから、作
者が非常な感動をもって書いたであろう終景
と、死斗に向かうまでとの間に、くい違い一
が感じられず、中途半端な樂天性が印象に残
ってしまいます。これは、作者が意図したこ
とも知れません。たしかに、例えは『郡上
一揆』の幕あきの、ヒステリックな毛見取の
説明のような、これでもか、これでもかとい
う押しつけがましいものは感じません。しか
し、初景の貧しい描写は、第三景、諸行無常

一

の鐘 における、イシの苦しみ、また、第十
三景 死闘 で部落民常吉を殺すことと結び
ついてこないのです。土地をとりあげられる
といふ、いわば農民にとって死活問題を、
指導者でない――というより指導者をつくり
出した百姓たちを通じてもっと描くべきでは

矛盾と関わり合っている矛盾とは感じられず、一人の人間の混乱という気がします。ここにも、最近の氏の作品にあらわれている、多様性と統一ということの混乱した考え方があらわれているようを気がしてならないのですが

☆その他について

一種の職人的仕事といふ感じさえします。ることは、集団——例えば普及活動においても一千という壁が仲々破れない——とも深く結びついた欠陥だといふような気がしますが……

作者の最近の作品『おれたちの夜』で、資本家の手先に、あり、たけの暴露事項をつめこんでしゃべらせる——という、私たちの側の作者がもつ共通の弱点が強くみられます。が、「真土村一揆」では、そこから一步突き進んで、対立者の内部まで鋭く描いています。こ

いは、この戯曲の、一つの大きな収穫だと思
います。しかし、ここでも、いろいろ評価だ
けでは押さえられないものがあるようだす。
長右衛門の、肯定面と否定面を矛盾として深
く描いてあるにはあるけれど、それがどうし
ても統一された一人の人物からでてきてる
考え方とは見えないのです。したがって、第二
景 おくり火の夜 で、「やむを得ません」
覆水盆にかえらず、矢はつるをはなれました
という長右衛門と、下人や、彌右衛門とがあ
いう内容で話す長右衛門が、明治維新のもつ

三
一
九
九

おいても、医療といふ場で米日反戦が進めて
いる戦争政策の告発と、その中での梶浦キク
や市橋の斗いと問題点が、読む者にストレートに伝わってこず、最後の合唱——「おれた
ちの夜」と同じ発想で同じ内容の——で、作者のひとりよがりな歌にすりかえられたよう
な気がしてなりません。これらの作品を通じて思うことは、ずっと以前の『日錦室蘭』の
ようをびーんとはりつめた情熱や、「生まれた家」のような作者の内部の血を出すような
葛藤が稀薄で、表現方法のみが色々かわった

(最近、【つぶてとかがり火】ができたと聞きましたが……）また、演集では、丸子氏が病氣で倒れた後自集団の創作劇については絶望的と聞きます。東リ演の兄弟劇団の作品を真に自分たちの作品としてとらえ、上演する為にも、仲間から生まれた戯曲について、今こそもっとも遠慮のない卒直な話し合いが絶対必要だと考えます。このことは、他の観劇批評その他どんな場合にも言えますが、毒に批評にもならないほめ命にはやめて、演劇歴

創作歴の長短や力量による不必要な配慮のない、批評、討論活動が展開されることを強く望みます。こういう観点から、例えば「郡上

「真土村一揆」平塚公演をみて

つ
く
し
の
会

一観劇後どんなことを感じ、心に残ったもの
があるかどうか？

はなく、皆手をとどけて、力を合わせなければいけないと云っていると思う。

—全体的にみて、脚本は史実に忠実すぎてドラマとしての構成上に弱点がでたのではな
いか。

— 関係の中のお爺さんお婆さん連中に何とかの形で登場人物と関係が深いとのことだ。 — そう、一揆そのものが歴史的に浅いために地元住民を傷つけない配慮から、八方美人となり総てを是認する結果になつたのだとおもう。

——長右衛門の理想が松木家を代表してはいな
いだろう。大旦那が舞台には登場しないが、
黒幕として強力に存在している点が、わか
りづらいところだ。

—演出の意図が十分發揮できたら、もっともっとすばらしい舞台ができたかもしないね。：：：個人的な見方だが、松木一族を権力の象徴として腹黒く描けば、みていてスカッとしたと思うが。

迫感がでると思う。

るの、地主制の肯定か、集団農場的な点の強調か、はっきりしなかった。

レ新興ブルジョア的な松木一族を同情的に描きうところに、この作品の問題がある。

一しかし、平塚市民にとっては、お互に敵味方という風に区別するより、むしろ同情

的に描いた方が受け入れやすいといふ点はあるね。但し、他の地区での上演の場合、

観客が素直に入りこめないのでないか。

が行われるまで、小作農が地主から徹底的に離れて、へばりついて、二代三代、

に持りとられた。しかし、これが松木の状況からして、明らかに地主の代表とみられる。

は、かけ離れすぎ受け入れられない点が多いとおもう。

—演出の意図が十分發揮できたら、もっともつとすればらしい舞台ができたかも知れない

ね。：：個人的な見方だが、松木一族を権力の象徴として復讐く描けば、みてへてス

カヲとしたと思うが。

一揆』の終幕にみられる作者の意図等につても、改ためて突っ込んだ話し合いができるならば全体の収穫も大きいと思います。こういふ

作業が、ややマンネリ化した、セミナールや創作部会を、もつと生き生きとさせ、実のものにしていくだろうと確信します。

- 52 -

前の側に同情的な松木の妻を斬るときにも
出る答：：また素三郎や長右衛門に対しても
の百姓のそれは全然異っている答。ドタバ
タにはならなかつたが、平板で物足りなさ
を感じた。

――景かな、佐次兵衛翁さんの堀へ落ちこ
む場面の舞台の使い方には感心した。
――京浜さん独特のもので、うまいね。
――暗転中の舞台袖の説明は全く効果的だった
ね。観客の注意をあそこに集中し、転換中の
の煩しさなど気にならなかつた。絶讚の一
語につきる。

――幕あきの音楽も効果的だったが、更に観客
席から、あの半裸の百姓の一団が「大へん
だア」と叫んで舞台へ走る、あのビリッと
した空気は是非でも観ている者を舞台へ
集中させる。すばらしい演出だ。

――京浜さんは、幕前や袖などの使い方に気を
配つていて、我々にも学ぶべき点が多い。
――しかし、一景の舞台へどうしても入りこめ
なかつた。感動できないのは何故かな。

――客席がうるさくて、後まで台詞がきこえな
かつたからだと思う。
――観客に責任を負わせるのは間違いものとい
ふことだ。やはり、ああいう特殊な観客を相手
にしたときの計算が十分必要だし、事前に
注意を与えるとか指導するとかで、うるさ
さは多少ちがつた筈。

――それでも、劇を創る側にとっては何の
手をうたなくとも、自然に舞台に引込むだ

けの力をもちたいね。

――一景で台詞をいう役者が舞台全体に分散し
ていて、上手と思うと下手というようで、
観る方はどこへ集中していいかとまどつた
のではないか。

――一台詞を云わせる百姓を整理すれば、一景か
らでも十分農民一人一人の個性がはっきり
でてきたはずだ。

――農民全体の処理は実に自然で、我々のや
た「牛鬼退治」の農民と比較して、土に生
きる人間の生活がじみでていた。

――学ぶべき点があるね。

――しかし、個々の農民の性格は出しきってい
ないね。例えば台詞の多い彌右衛門の性格
なども、対松木、対愈吉、対弁護士、対農
民と台詞からもはつきりする筈だが、違ひ
がない。台詞の少い百姓たちは尙更のこと
で、兵右衛門の色話をどく先だけの感じだ。
――一景以後、主要人物以外は誰が誰だかわか
らなくなってしまった。

――あれは役者の研究不足ではないか。百姓一
人一人が一つのことに示す反応は、各々ち
がうはずだ。

――最初から百姓全部が一致団結した訳ではな
い。小前の急進、穩健派などの対人関
係、葛藤がもっと明確に出ていればね。そ
れを乗りこえてはじめて一つにまとまつた
のだろうが……

――人物の位置づけだが、添田などは何のため
に登場したのかな。又彼の性格はどうもは
ね、みっともなかつた。あれでは百姓とし

つきりしないね。

――小料理屋での添田の登場、必然性がない。
――松木家の次男坊の道次郎だって、松木家を
批判するのか是認するのか、はっきりしな
いね。

――素三郎は権力の象徴なのだろうね、目的の
ためには手段を選ばない、現行の権威を維
持するためには暴力も肯定するという面を
表わしていると思うが。

――一張子の犬をこわすところに、その点がよく
表われていた。

――あの時のフミの態度、つまり彌右衛門に對
して、対夫、対義弟への心理的差違、動き
が強くていたら、斬られるときに、より
以上に同情をうけたかもしれない。

――彌右衛門の貫通行動は……わかるとしても
松木に對して態度を硬化していく、その
過程が……苦惱として現れなかつたのは残
念だった。

――素三郎に襲された大張子を、黙つてもら帰
るときの彌右衛門の眼、無言の中に展開さ
れる内面的緊迫感をもつと出してもよかつ
たね。

――二景の小女……ね、うまいと思った。
――あれは役者の地かな？ 全然スキがなか
つた。こわい者知らず、相手をまわすしやべ
る無教養さ、あの味はなかなか出せない。

――イシ婆さんも絶讚にあたつた。
――彌右衛門の妻のラストシーンでの泣く場面
ね、みっともなかつた。あれでは百姓とし

て力強く自分の子供を育ててゆくといふことは考えられない。

—後日談にふみが婚家から去ったとあるから

その精神的な弱さをだしたのだろう。

—それは、真土の歴史を知る人の話で、劇全體からみたとき、百姓の妻としての強さが必要だと思うね。感情まるだしでは、表面

的な熟演で線が細くなり、思想がなくなる。

—彌右衛門の家の中の妻の立場をつよく出せれば、ラストでたとえ泣かなくても感動を与えることはできよう。

—九景で芸者がでたが、あの芸者登場の意義は何だろう？

—小料理屋のふん団氣を出すためさ。

—彼女らだって、最初から好きで芸者になつたのではない筈だが。

—例えは、里子云々のところで、一寸自分の身の不遇を思いかえしてみると、動きが笑って話す中にもあってほしい。

—芸者といえば、イシの娘のイネね、幼なじみに逢うが物足りなさを感じたね。

—あれは四景での遊びのときの、イネの研究不足からしている。あの場は家庭の貧困から、がんじがらめにされたイネが、いやいやながらに芸者になつて、自分としてはどうにもならない追いこまれた姿を表現できなかつたために、九景のあの場が生きてこなかつたのだ。

—四景はただ単なる遊びきにおわり、九景ではその名残りを惜しむという風にしかみえ

なかつたのは残念だね。もとと背後にある

重圧といふものを出してほしかった。

—あの恋人の峰松、四景と九景では、イネへ

の態度なり見方に変化ないのかな……どう

も物足りない、奥歯にものはさまった感

じだね。

—ではこの辺で、裏の方についてみよう。

—装置の転換の速さには恐れいりました。

—二重の使い方もうまいね。

—しかし、寺の場面だったかな、三景では手

前の方は行き来できない、話もきこえない

想定が四景では自由にそれをやっている。

どうも、あの部屋のつくりが理解できなか

った。あれは役者の責任か、演出上のミス

か……。

—衣裳、場面、季節ごとの変化をつける工夫

つくしでは真似のできない處で感心するば

かりです。あの芸者衆の着付け、着こなし

は一寸お座敷へ出しても通用するね。

—効果も申しひないが、あえて文句をつける

とすれば、迫力ある音を自由に使うために

も、立体的な音を出すよう裏方は気をくば

りたい。

—メイクアップは、百姓の汚れた泥臭さがで

いたとおもうね。

—照明は全般的にみたらいいが、個々にみた

ら不必要な変化が一幕中にあった。また時

には溶脂を使いたい。たとえ演出が嫌いで

一では最後に、京浜さんへ一言ずつ。

—観客をあれだけ動員できたということは、すばらしい。その土地と密着した劇を創らなければと痛感した。

—京浜さんの劇団員のエネルギーを肌で感じじだね。

—京浜さんのことができた。これから的发展を祈る。

—以上、同じ仲間へ個人的な差はあるが、つ

くしの会で話したことを大きめに拾つてみ

ました。小生、東北の農村の三男坊として生

まれ、現在つくしへ入会して三ヶ月余です。

とにかく、真土の農民のようだ、指導者がな

いときの農民のみじめさは、口だけでは表現

できないものがあり、因習、惡習、迷信とい

ろいろな要素がに入る東北農村とは歴史的にも

違うと知りつつも、やはり下層農民を浮きぼ

りにしたいと思った。興味深く観劇させて下

さった貴劇団に改めて感謝し、これからも、

よりよい劇をつくつていってほしいと願う。

—つくしの会でも、劇団員は少ないが我ら独

自の歩みをつづけて行く。乱文にて失礼。

(及川記)



劇団はぐるま
名古屋公演 「ひとりっ子」
(脚色・こばやしひろし)
演出・松岡直太郎

演研 でくのぼうの会 柏植 洋

☆名古屋公演の意義
東海三県下(岐阜、愛知、三重)の中心である名古屋での独自公演は、岐阜のはぐるまにとったら、公演活動の一つの転期とも考えられる。昨年の名演例会での「郡上一揆」以上にその意義は高い。名古屋でも、地元劇団が長く活動しているが、最近やゝ低落気味であり、それだけに刺戟となつて、創造上に大きな影響を与えた。

中小企業センターホールを当日満員にした観客、そして終った後の熱っぽい拍手、これは名古屋の劇団では久しくみなかつたことである。やはり、素晴らしい舞台を名古屋の人たちも求めており、東京の専門劇団しかみないといふ固定観念でなく、現代の問題に深くメスを入れた質の高い舞台は大きな感動を与えるものだ。

☆「ひとりっ子」上演の意義は何か
みていて、軍国主義の精神的風土が日本の民衆の中に深く残っていることを感じて、眞実、うすら寒い思いをした。それを集中的にあらわしているのが、九州という風土とともに云える。今はもう、口だけで戦争反対を叫ぶ

☆さて舞台上の成果は
まず幕あきの処理 暗くなり音楽が入ってのナレーションは冗長で聞きづらかった。これは一考を要する、特に、舞台とそぐわないテレビドラマの音楽とナレーションとのくいちがいが気になつた。同じく音楽のことを云えば、各幕切れの音楽がテレビ的甘さをしてしまい、現実味を弱めた感じがする。全体を通じて、一番感動的だったのは、母親と

時でなく、もっともっと人間の精神の奥深く入ってゆさぶらないかぎり、戦争への道は大手をふって進んでいくのではないか、そのためにも、これを人間を描くことによつて完成される演劇で訴えたことの意義は大きい。特に、新二の家の客間に全ての問題を持ち込んだオーディックスな脚色は成功しており、これがこの公演成功的土台であると云える。

さて舞台上の成果は
まず幕あきの処理 暗くなり音楽が入ってのナレーションは冗長で聞きづらかった。これは一考を要する、特に、舞台とそぐわないテレビドラマの音楽とナレーションとのくいちがいが気になつた。同じく音楽のことを云えば、各幕切れの音楽がテレビ的甘さをしてしまい、現実味を弱めた感じがする。全体を通して、一番感動的だったのは、母親と

に感じさせた。大介(永井)の例えばかりしろ側のメイクのままで等がそれを一層助長していたようだ。とみにくらべて、主人公新二(浦田)の苦悩はあまり伝わらなかつた。それは、特に京子(馬淵)との関係で描かれるべきところが、京子の方も浮いてしまい、現実感が乏しかつた。そのため、あんなに新二が深刻に悩む必然性が弱く、従つて最後の大切なセリフ「僕はもう一人っ子じゃない」がみる側につきさせてこなかつた。新二がもつとはつらつとした面をもつた高校生になり、その変わってゆく過程を突つ込めばより深い感動を生んだろうが惜しい。新二と京子の場が、いつもも時間を長く感じさせたのは、この現実感のなさが大きな原因と云える。

それに對して、大介をはじめ軍国主義の体制をえがいた側は、よく戯画化されて描かれていた。特に、辰也(田村)の出来はよかつたし、演技の余裕遊びが楽しめた。合格祝いの宴席の場は、日本人のもつ軍国主義の精神風土を強く感じさせて、出色だつた。また、乾(藤沢)も、地方都市の市会議員を上

く表現していった。もう一つ、演技上の歎を云々に對する大介の變化とみを本当になく、カッとなつて対決し、とみの強さに負けず、それをみて新二がぐっと變るところを出せば、もっと盛り上がったものになつただろう。

☆装置もまとまっていてよかったです。しかし、遠見がつくりものといふ感じがして、奥行きがなかつた。道のむこうに、煙を感じさせるものが欲しかつた。効果のタイミングは実によく、特にラジオの修理で入る音と、テレビをかけた時の音など全く心憎いできだつた。

照明は、下手よりが暗くなつて人物がかけた。それに、外から部屋に入りこむ光の処理ができていないようだつた。☆やゝ細部に触れすぎた気もするが、とにかく、自立劇団の舞台でこれ程感動を受けたのは近年ないことです。東リ演の運動の方向を示している舞台で、大いに感激を受けました。

手元に脚本がないため、内容的にくじ違ひ等あると思いますが御了承願います。

「黒土」、岐阜ほぐるまの「ヴェトナムの炎」は消えないので、京浜の「小選挙区制反対の寸劇」、劇団労芸の「ビカの蔭から」があり、また「天満の寅やん」にまなんた作品が、名古屋演集と舞芸小で生まれています。行動隊・小公演のための脚本を特集するのもいいかとも思います。

機関誌「東リ演」について

「東リ演」は7月発行予定の4号がおくれ（総会準備にはタイムリーでしたが）必然的に5号を10月上旬、6号を11月下旬という形で、年内6回発行を確保します。そして、順調にいけば、67年からは西リ演との合同誌への発展という考え方をします。

5号の内容については大別して、(A)問題提起、(B)報告—この号では総会・ゼミナールの総括、(C)戯曲とおさえます。

(A)には「観客の要求をどう内容でとらえるか」又「創造と普及のかかわりーその論理と実践」をテーマにしたい。一九七〇年を自途中にした私たちの集団の強化が緊急だ、といふ観点で、ここを追求したいのです。

(B)は合同ゼミナール参加集団の終了後まとめ、各プロジェクト・ゼミの報告、第四回総会の論点とまとめ、そして西リ演総会のまとめ以上四項を集録します。

この他、全劇団員が東リ演に集中できるよ。(C)現在紹介したい戯曲は、甲府やまなみの「黒土」、岐阜ほぐるまの「ヴェトナムの炎」の中で自分でも、どうしたら有効な機関誌がつくれるか、を討論して刊行所に反映してくれるとありがたいのです。

6号では少し遅いのですが—甲府、埼玉県南、福井、松本などを訪問して地域演劇状況の掌握をやる必要があります。(D)の報告に類するこのしどとも、原稿を依頼するやり方では不充分で、積極的な方策を大胆に実行しないと局面はひらけません。

これも(B)に入るもので、いまから秋の公演の稽古に入る劇団の演出部に依頼して、詳細な稽古場記録をつくってもらい、それをこの号にのせたいと考えています。

(C)の戯曲は、活動方針にもあるように、各劇団で上演可能な一幕戯曲(50~80枚位)を二篇とりあげたいとおもいます。積極的な推進を期待します。

(A)については、「われわれの批評活動」というテーマはどうでしょうか。私たちの批評活動はまだまだ弱いだけではなく、その原則も統一的につかまれていません。相互批判が運動の実質的な発展の保証である以上、その基礎の思想を明瞭にする必要がありそうです。

6号では少し遅いのですが—甲府、埼玉県南、福井、松本などを訪問して地域演劇状況の掌握をやる必要があります。(D)の報告に類するこのしどとも、原稿を依頼するやり方では不充分で、積極的な方策を大胆に実行しないと局面はひらけません。

東日本リアリズム演劇会議 一九六六年活動方針（案）

一、みんなで発足の立場はどう

東リ演も愈々第四年目を迎えます。それに付けても思い出すのは

しく頭をさせる結果となりました。

東リ演が発足した一九六三年という年です。文学座を分裂させて福音を労働者階級を先頭にした民主勢力は、新安保体制の下におしすす田恵存を指導者とした「雲」が結成され、「全国労演」が発足し第一回総会が開かれました。流派カラーは様々でも民主主義的良心と原潜香港反対等、ベトナム、朝鮮への侵略、中国封じ込めの戦略体いう点では違うところのあった新劇団の中から「雲」のような反動側やアメリカの財團とはっきりと手を結ぶものがあらわれたのです。「労演」「東リ演」という戦線の結集が急がれたのも、民族的な主主義的な演劇を守り、発展させることの緊急性を自覚したからに他なりません。私たちは文化戦線、演劇戦線においても、新安保体制がいかなるものであるか次第に理解してきたのです。

思想文化戦線における米日反動の攻撃の根幹はいわゆるケネディー、ライシヤワー路線と云われ、その内容はコンロン報告に明らかにされていますが、その思想文化攻勢は労働組合を中心として学問、教育、文化の分野にわたり広範な日本人民の中に深く入り込みました。特に米ソ両大国間の平和共存ムードは定式化されて、民主陣営にも一定の影響をおよぼし始めたことが、ケネディー、ライシヤワー路線の侵入を一層助け、民主陣営内部に分裂と右寄りの傾向を著々とわわれの演劇文化状況を主体的に展開していくためには、観客に

責任を負う集団が緊密に連結し、力値をつよめていく必要が、しかも急速にあります。……」「……われわれの観客の演劇への要求は質量ともに最高最大のものであり、しかも日と共に進んでいます。この要求にこたえることが演劇芸術家の任務であるとともに生甲斐そのものだといえます。……」「われわれはこの結集をとおして：……歴史と国民から付託された重要な任務を果します。」これらの決意にも見られるように、私たちは固い決意で東リ演に結集したのです。又結成の言葉には、それぞれの立っている地点を拠点として文化戦線の統一のための共斗の必要性を訴え、そこを基礎に全国的な展望を持って斗うことを呼びかけております。すなわちそれは

二、緊急な情勢と私たちの決意

あれから丸三年。情勢は緊急の度を加速度的に加えております。アメリカ帝国主義は六月二十九日よりのハノイ、ハイフオン爆撃につき、最近では南北ベトナム境界線の非武装地帯の爆撃を行い、今や地上戦斗を北へ拡大する危険性をはらむに至っております。この狂暴な重大な侵略行動は断じて許すことはできません。それまでにも南ベトナム人民に対し毒性化学薬品、毒ガス、ナベーム、高性能爆弾により「焼きつくし、破壊しつくし、殺しつくす」野蛮にして無法な殺人魔の所業をほししままにしておりましたが、北においては百以上の教会、二百四〇の学校、八〇の病院を統爆撃し、六百回にわたる水路、六〇回以上のかんがい施設を爆撃するに至っては、も早や既に云うところはありません。しかも高性能爆発と手りゆう弾を投下していくこと、見さかいのないベトナム人民皆殺しの目的

「東リ演」こそ斗ひの拠点であるところであり、「東リ演」という拠点のもつ意義を、改めて確認する必要があると思うのです。「東リ演」の立場は基本方針の2で明確に打ち出しています。「私たちは新しい日本の演劇運動がその創始から連続と保ってきた。現状変革の思想と歴史を発展的にうけてつぐ意味で、斗う国民の立場観点を自身のそれとして受けとめます。」つまり現実には独立と平和と民主主義と生活を守る斗いの中で、演劇では民族的な民主主義的演劇の創造普及の中核としての責任を率先して負うことと誓ったことに他なりません。私たちは常に機会ある毎に全員で発足の立場を確認することが大切だと思います。

あることは既に明らかです。血にうえた兇悪犯罪者、アメリカ帝国主義を、世界人民の名においてしゆん威に裁かなければなりません。又なによりも、有史以来最悪最兇の、世界一の物質力と武力を誇るアメリカ侵略者に対し勇敢に斗っているベトナム人民を支援する為に、可能な限りの支援をし、活動をすることは私たちの当面の第一義的な責任であります。アメリカ帝国主義を滅すために力を合せてたたかうことは、世界人民と、平和を愛するものすべてのもつとも大切な任務です。

国内においても、日本独占の政府は血に狂うアメリカ帝国主義のアジア侵略戦争に全面的に協力し、アジア人民、日本人民を敵視するあらゆる反動的な体制を急速に強引に確立しようとやっきになつています。いまや、アメリカ帝国主義を頭として、イギリス植民地

主義者、西ドイツ報復主義者と共に、日本軍国主義は世界人民の最も兇悪な侵略者として返り咲いております。ここで細かく述べるゝとまはありませんが、既に御承知の如く小選挙制の陰謀は憲法改憲をまつまでもなく、急速に吾国を暗黒のファンショ的支配にみちびく、兇悪な反民族反民主の陰謀であり、このことを過小評価することは許されないとあります。米日反動が少しでも不利になる活動はたとえその芽であっても圧殺されてしまうことは明らかです。私たちの演劇の創造普及活動も例外ではありません。

私たちはここで、緊急な情勢の下で、東リ演加盟店の多くの劇団が精力的に、民主勢力や広範な大衆の中で、自主作品と創造をもって共に斗って来た積極的な姿勢を確認すると共に、更に当面の斗いの中で、平和と独立と民主主義と生活を守る為の、切実な作品と上演を斗いとて行こうではありますか。広範な大衆に愛される質の高い芸術作品を沢山急いで大衆にとどける必要があります。私たちの作品と上演は今何よりも、日本人民が一体となって反動支配に対して立ち向う姿勢を持った気高く雄々しい説得力をもったものを最も必要としております。このような愛国心と連帯と献身の満ち溢れ

た中味をもった、様々な地域、職場の人々の息吹きが、生き生きと生活し斗う形象を抱むために努力しなければなりません。説得力をもった否定的形象を創造することも未解決の課題で、これも非常に重要です。

第四回総会準備の為の運営委員会で、今回の総会には特別決議は止めようではないかという意見が多くありました。その理由は今迄のやり方が形式的であったことと、決議すべきことは活動方針の中に位置づけることが正しい態度ではないかと云うことです。

私たちは何よりも時代や情勢に敏感であり、正しく把握する能力は先づ大切です。しかるこれだけでは足りません。それを常に創造普及の実践活動の中に正しく位置づけて、創造内容の中に生かすことができて始めて、創造集団と云えるのです。すなわち私たちは東リ演を拠点として、常に労働者階級を先頭とする日本人民の生活と斗いに頼り、共に斗い、戦線の統一のために努力し、それに役立つような創造普及を積極的におしすすめ、更に創造の質を高め、より多くの人々に普及する活動を発展させる為に頑張りましょう。

三、組織の発展強化のため

東リ演の発展強化のためにいくつかの必要な任務を私たちは持っていますが、その基礎として根幹になる最も大切なことは、東リ演を拠点とした私たちの團結の強化であります。「もっともっと團結を！」という希が、今まで何度も云われてきましたし、かなり積極的な意見もありますが、團結を強化するためには先づ皆で決定

したことは皆で実行する。つまり東リ演の決定を尊重することが大切です。そこを軽視して、云いたいことを云ってしても團結が強化されるわけはありません。今年度に当って先づこのことをお互にこれからも守ろうではありませんか。次にこれも当たり前のことですが民主主義的な運営を皆で確保すること、つまり（イ）民主主義的な運

営と集中、このことが團結の幹になると思ひます。

(1)については昨年度の方針として決定された事務局体制の改善により、一步の前進が見られたと思ひます。本年度は更に「プロックから一名の事務局員を出すことができたならば一層現実的にその役割を前進させることができると思ひます。未だ財政的裏付けも不安定であり、総会・運営委員会の決定を実施するためにより能率的になると思ひます。

又東リ演係の会議を持ち得たことは、加盟劇団内にかなり東リ演の理解が深まり、集中度も深まりました。担当者会議を今年はもつと計画に重視して行きましょう。

(2) プロック体制の強化について

昨年度、プロック強化の方針を立てましたが、その取り組みには各プロック間の格差が見られます。先進的な活動をしたプロックの経験に学び今年も昨年度の方針をひきつぎ、プロック強化のために努力しましよう。組織的にはプロック活動を基礎に、それぞれのプロックの自主的運営により東リ演の方針を実践して行くことを強調したいと思ひます。来年度の総会報告には必ずプロック総括を含めましょう。今年から特にプロックにおけるゼミナールを重視したいと思ひます。すでに行なわれているところもありますが、その観点としてはプロック内の地域、職場の劇団サークルの発展、向上、育成を重点において、ゼミナールを開催することです。このプロックゼミを成功させる指導力と影響力をを持つような劇団としての私たちの努力は東リ演の基本的任務の一つです。今年の方針としては、各プロック大衆的な「自主的演劇の発展と向上のためのゼミ」を重んじて、東リ演ゼミ「問題点の集約として、重点的なゼミを」という

ことで相互関連を持ちながら、より深く問題を追求するセミナーを持つ行きたいのです。

(3) 機関誌「東リ演」活動の確立

多忙な創造普及の活動の中で京浜協同劇団が編集、経営にわたっての不屈の努力で機関誌東リ演が三号にわたって刊行されたことに先づ無条件に感謝したいと思ひます。

三号にわたって、かなり重要な問題が提起され、五つの作品が発表され、西リ演からも私たちの演劇にとっての充実した内容をもつて論文が送られてきました。問題提起と東リ演の活動内容と、早くも組織者としての役割を果しております。この機関誌を全国の仲間たちにとどけることの意味は大きいと思ひます。勿論東リ演内部においても、今后名実ともに私たちの機関誌としての機能を果すようこそぞれのプロック、加盟劇団の努力が必要です。最も緊急にして、実務的にも考え方としても確立しなければならない問題として、財政と拡大の問題があります。機関誌は東リ演自身の存在の主張でもありますから、一旦発刊した以上、都合が悪くなつたからと云つて引っ込めることはできません。持続的に系統的に刊行することは私たちの責任です。

加盟劇団は劇団内外の講読者に確實にとどけることと前納制が可能な程の、積極的な組織配布集金が大切です。又講読者の声や要求を込む努力が大切です。次に拡大ですが、私たちは各プロック地域の劇団、サークル、文化団体、や労演内の各サークルに一部づつ位拡げることは不可能ではないでしょう。これらの努力は独自な活動でありますから自然に委せることなく、計画的に組織することが大切です。これらの努力の結果、機関誌活動の声は当然、運営委

員会に反映され、機関誌の役割はもっともっと高まるでしょう。以上機関誌活動の確立を提案します。編集委員会をどうするかは前回から懸案になっていますが、それは別に担当者から提案してもらいます。

(二) 東リ演加盟の拡大について

組織を拡大するという原則について異議はないのですが、過去三年の経験で若干の問題がでて来ました。先づ一度も総会に参加しない加盟劇団があり、ほとんど東リ演加盟としての意味をなしておらないこと。この問題についてはロックの自主的な判断により、当事者の劇団と話し合って去就をきめることになりました。けれどもこの際、東リ演として基本的態度を決める必要があります。今後は新加盟の場合、二劇団の推薦又はロックの推薦によって運営委員会が決定する。空白の地域に新しく加盟希望があるときは、三役或は運営委員会より二名の者を派遣し、充分話し合ってから決定する。これは決してもいいぶるわけでもセクトでもありません。

東リ演設立の趣旨から特に空白の地域にロックをつくるだけの力と、組織的にも創造的にも中心になるとの可能を一定の業績は必要だからです。例えば労演にしても、東リ演と性格は違いますが一定のサークルを持ち定期的に例会を持つことができなければ労演はつくれませんし、新しい労演をつくる場合は、既成の労演やロックが、育成援助して一本立ちに成るのを助けております。

四、創造活動の高揚のために

「創造を主軸に」とか「創造の質」の問題を抜きにして東リ演の発展はあり得ない。という声は、あらゆる機会、あらゆる場所で聞

東リ演の任務は只単に加盟をすすめるだけでなく、東リ演を東日本全域に広げる為に、援助、育成等の仕事も積極的にすることが大切だと思います。これらの基本的態度を確認して細かいことは新運営委員会でおし進めることを提案します。

(三) 西リ演との連帯について

かねてから、ゆくゆくは日本リアリズム演劇会議に一本化しようという声がありましたし、又そのことは必要なことだと思います。一方それは云いながらも自然成長に委かせて実現に向ってのてだてを講じて来ませんでした。今年度からは西リ演と話し合い、両者の三役又は運営委代表の規模で少なくとも二回は連絡協議する機会を持つ。この会合の内容はあくまでも両者の経験交流であり、演劇運動をすすめるための当面の問題、理論的創造的組織的問題を隔りなく交流し討論する場であり、性急に一本化の問題を決める場にはならないでしょう。先づ一緒にやれることはやって行こうといふ積極的な態度と実質的な行動から始めるべきでしょう。機関誌上に於て、又今は東リ演独自の年中行事であるゼミナールに西リ演のバックアップを頼んで、西リ演にも呼びかけをしました。西リ演との交流を積極的にしようではありませんか。尚、この決議を至急西リ演に申し入れ、両者一致したところから直ちに予定を組みたいと思います。

かれます。私たちには原則においては一致しても、未だ東リ演としての共通のてだてが確立されておらないので、それぞれの一家言であつたり、要求不満的な意見になりがちなのは否めません。愈々本年からはそのてだてを見つける必要があります。私たちが標榜するアリズム演劇は本質的には一定の政治的思想に基くものであり、その政治的・思想に基いて創造の方法を確立していく運動であり、その様な運動から生み出した演劇をアリズム演劇と云つておるのである。東リ演は先ず創造普及の実践を尊びます。すなわち先ず実践であり、正しい理論の確立であり、実践と理論の結合であります。この三つはいづれも重要であり、この三つの有機的な関係を正しく捕える必要があります。

ここで私たちが明確に区別して考えなければならないのは、一般的に「創造を主軸に」という強調と、アリズム演劇の確立との相違についてです。一般的には私たちの演劇は、舞台の成果によってその価値がきまります。いくら立派なことを云っても舞台が貧弱で説得力を失たないものであつたら一文の値打もないのが嚴肅なる事実です。だから先ず第一にしっかりした基礎技術と表現能力を身につける必要があるのです。たとえ上演の思想は正しく把握していたとしても、舞台において俳優が正しく形象化し得なければどういうことになるでしょう。東リ演内部にてもあり得るのですが思想はともかくとして、歴然と舞台芸術としての基礎的な誤りを犯している場合があります。東リ演が創造集団の結集体である以上、東リ演内部でこそ兄弟的な親身な批判と援助が行なわれるべきです。もっと積極的に東リ演自身で加盟劇団全体の創造の質を高める何らかのてだてを最初はさやかなものであつても、恒常的

な組織として持つべきだと思います。「うたごえ」においても、各段階の指導者講習会や教育者会議等で一定の成果を挙げております。

こうすることもかゝって云われておいたことを聞いております。「たとえ思想的にはどうであつても、機会があれば先生について正式に発

声を習った方がいい。」と。まだまだ東リ演の俳優の多くは芸術家としての態度が甘いと云われております。商業演劇や映画やテレビ等の俳優から、いくらでも摸取できるものはある筈ですし、現実の生活の中からもいくらでも学ぶものはある筈です。学び観察し摸取する能力は大いに必要なことだと思います。可能な限りの努力と創意工夫をすることが習慣になつていかない芸術家は恥かしいと思わなければいけないし、それに気付けば直ちに純真に向方にとり組むことが大切です。プロック、ゼミ等で東リ演のすぐれた俳優や先輩を招き話を聞くことも大いに刺戟になると思ひます。この様な努力は可能を限りるべきです。

創造向上の努力をおこなつたり軽視することは誤りですが、一方だからと云つて私たちの運動を遂行する中で、創造的向上や完成度を急ぐあまり、事実上、東リ演の存在理由すなわち創立の趣旨を軽視することにならないよう、私たちの運動を正しく理論づけ学ぶことを怠ってはならないと思ひます。「転ばぬ先の杖」と云う言葉があります。現在私たちは創造活動を旺盛に展開するに当つて、東リ演はアメリカ帝国主義と日本独占の反民族的反民主主義的支配と斗つて、労働者階級を中心とする人民大衆の新しい民主主義的な権力を打ち建てようとする。そのような変革の立場に立つて、その途上における演劇の創造普及の問題を日常不斷の実践の中で、どのように向上させ發展させるかという結集体なのです。御存知のように

米日反動勢力が政治的經濟的に支配している以上、高度に発達したマスコミやあらゆる文化手段、文化施設を手はなすわけはありません

んし、たとえ労働者階級を中心とした全民主勢力が政治権力を奪取したとしても、旧権力のブルジョア的ブルジョア的文化の影響は続くのです。更に私たちの変革の立場に立った民主主義演劇は、社会主義的な政治革命が達成されてから社会主義的文化革命として全面的に展開されることになるでしょう。私たちは現在、旺盛な創造活動をくりひろげなければならぬ時に当って、私たちの運動のベースベクティブを深く理解する必要があると思います。今、私たちは支配的文化藝術に対し、舞台によって、その成果によって斗い批判することを重視しなければなりません。そのようにして敵の反動性と欺瞞性をバクロし、その影響をひろげるために力を尽す必要があります。又最も大切なことは、働く人々の奥深い心や希いとふれ合いで、新しい自主的な演劇をうちたてて行くという歴史的な使命をおわされているという自覚です。このような私たちの文化が多くの人々にしつかりとうけとめられ、支えられ、さらに発展するとしたら、文学に、映画に、音楽に、数百万、千万といふ人々の中に深く入り込んだとしたら、私たちの藝術の質と量と速度は、労働者階級を中心とした人民大衆の斗いに直接大きな深い影響を与えるのです。又そのような活動をしたいと希望っているのが東リ演です。私たちの藝術は人民大衆の斗争の環が強まり拡がるのを援け、豊かにするものでなければなりません。つまり私たちの藝術は大衆的なものであり、同時に大衆の思想や感情や趣味を高めるものでなければなりません。支配に対決し、眞実の演劇を普及する、そのための形式をつくり出すことが私たちの主要な任務です。そしてこれは息の長い仕事です。創造を主軸とするとはそのことに他なりません。

(一)ゼミナールについて
事です。創造を主軸とするとはそのことに他なりません。

東リ演ゼミに創造問題を据えるという懸案は、諸種の制約のために思ひように行きませんでしたが第六回ゼミは「巣ばなれ」の実地の演習という形式で一步前進したわけです。

それとも外に置くかで未だ明確な解答は出しません。しかしながら東リ演の現在の力で、持続的系統的に、指導者講習会や演技者のためのゼミナールを独立に持つことは大切です。新しい力に対する教育の事業は運動にとって不可欠のものだと思います。専門家の援助も考えられます。

そして東リ演の周囲を拡げ、自主的な演劇を強化発展させるための目的のゼミナールも、事実上続いているわけですから、明確に方向づける必要があると思います。

第六回ゼミの総括で一つの方向が出るとは思いますか。

お互ひの芝居を見ることは、なかなか全面的には行なわれません。一部において昨年度提案した指導者の交流が行なわれましたが、その内容や反響について機関誌紙に報告をのせる必要があると思ひます。昨年度の提案は、今年も部分的に行なえるだけ行なうことは必要だと思います。

新しい提案として、私たちの舞台創造の質を向上させるために、普及としても適當な、私たちの上演にふさわしい一幕ものを、一年間の課題戯曲として、その創造普及の実践を持ち寄り、相互研究しあり互いに学び合う。この様な企画が行えたならば創造水準の向上に

非常に役立つと思います。

旺盛な研究心を刺戟し、又自分たちの目安が生れ、眞の創造団体の結集として特色があらわれることでしょう。勿論、それぞれの自主性を重んじ、年間スケジュールがそのため狂うこと等は配慮しなければなりませんが、第一年度は、どことどこ、第二年目はと、いう風に地域や都合で、三年計画位に分ける方法もあります。作品も一年毎交ってもいいわけです。この課題を年間もつことで、演出演技の研究会は充実して持てるわけです。

創造論議を私たちの目的に向って真に活かすためにも私たちは大胆なてだてを見つける必要があると思います。

(三) 理論活動の重視について

私たちは実践者であっても、リアリズム演劇について、それぞれの見解について、それを深めるために理論的な作業を重視する必要があります。機関誌東リ演にもいくつかの見解が提起されました。それについての感想、意見等も、意識的にとり上げ、深めていく必要があります。又三号に土屋清氏が野村喬氏への鋭い批判を提起しております。東リ演发展のための理論作業を盛んにしようではありませんか。

(四) 創作部会について

今年一月十九、二十日の創作部会では、第三回総会の方針を確認し、来春東リ演作家会議を発足させることとなりました。それまでに各ブロックの作家集団の活動を組織することになり、既に岐阜は発足しました。その他のブロックも準備をすすめ、東リ演内外の創作戯曲の発展向上のために、創作部門の積極的な活動のためにガンバリましょう。

編集あとがき

* 暑中お伺い申し上げます。

ひまわりと 竹桃にジリジリ照りつける夏の太陽は、原爆とはそれに、米軍の南北ベトナム侵略がダブって、平和へのたたかいの白熱の意志を燃えあがらせずにおきません。合同ゼミナーと東リ演総会、その炎熱をつらぬいて成果あらしめましょう。体を大切にしてください。

* 体といえば、名古屋演集の丸子礼二さん、舞芸小劇場の名取子さん、京浜協同劇団の郡山勝利の三人がたおれ、現在入院中です。よせがきでもおくって、一日も早い戦線復帰を、はげましてあげましょ。

* ゼミ・総会で、静芸のなかまたちには又お世話になります。よろしくお願ひします。

* 今号も計画の乏しい編集になりました。アテにしていたいくつかの依頼原稿もはずれ、取材にとんで行きたくも金がないーといつた嘆きを解消するには、とにかく割当分の誌代だけが回収されれば…本当にあと一息で、誌面の改善がはたせるのです。グチをいうのはいやだな、とおもいながらのグチです。

* 16頁の「東リ演加盟劇団一覧」中、新潟むぎの会を東北ブロックとしたのは、関東ブロックの誤りです。訂正しあ詮びします。

発行・機関誌「東リ演」刊行所

川崎市上平間1275 京浜協同劇団内
電話 川崎 (044) 8815 番

印刷・クロカワ印刷所

川崎市中丸子582番地
電話 中原 (044) ② 6094 番
